

「深い森のほとりで」

作 福山啓子

登場人物

- 原 陽子 53 歳 国立埼玉みらい大学獣医学部教授。大学初の理系女性教授。免疫とウイルスが専門。
浅田真理子 22 歳 獣医学部4年生。バレー部リベロ。集中力がある。加賀の研究室にいたが、ほとんど指導してもらえず、退学の危機に。
本田隆一郎 85 歳 獣医学部名誉教授。陽子の恩師。日本ウイルス学会名誉会員。
原理沙 26 歳 陽子の姪。バングラデシュでNPOの活動をしようとしている。一見内向的。母親に負い目を感じているが自立したい。
原麻子 55 歳 陽子の義理の姉。理沙の母親。なんでも完璧にこなす専業主婦。娘が未婚で定職にもつてないことから四大に行かせたことを後悔している。
田部信彦 40 歳 大手製薬会社のやり手の営業マン。人を見定めて態度を決める。加賀にはあえてペコペコして見せる。
山口美恵子 53 歳 大学の技術移転機構のNo.2。弁理士。研究者と企業を結ぶ。元は陽子同様本田の研究室の一員だったが、結婚・出産を機に辞めた。
福本則夫 35 歳 任期付き研究員。ポスドク。陽子が准教授のころからの研究仲間でもある。
加賀剛（つよし） 52 歳 獣医学科研究科教授。陽子と同期でライバル視している。

時 2017年～2023年

場所

農学部獣医学科の研究室。下手側は間仕切りで仕切られ、陽子のデスクがある。上手側に作業台と流し、冷蔵庫、様々な機械が並ぶ。ホリゾントには時折緑の森が全面に広がる。

第一場 2017年 2月下旬 午前

誰もいない研究室。陽子が書類の束をデスクにたたきつける。
ややあって、福本がおずおずとドアを開ける。

福本 おはようございます。

陽子 おはよう。

福本 科学研究費の申請結果、出たんですか。

陽子 ダメ。不採択。

福本 そうですか…。

陽子 大体枠が狭すぎるんだよ。うちの大学なんて文科省の予算割り当てが東大の十分の一だもん。競争的研究費なんつって、そもそもスタートで差つけすぎ。…心配しないで。絶対どっかから金をつ張ってくるから。

福本 …そのことでお話があるんですけど。…申し訳ないんですけど、辞めさせてください。
陽子 えっ。

福本 本当にお世話になって、先生にはほんとに…。

陽子 なになになに。

福本 僕もう研究員9年目ですから。次はないぞって加賀先生からも言われたし。

陽子 えっ？

福本 雇止めだって。

陽子 ちよっと待ってよ。加賀先生に人事権があるわけじゃないでしょ。

福本 そうですけど…。

陽子 なんとかする。他の教授にも頼んでみる。

福本 これ以上ご無理をお願いするの…。

陽子 無理って、冗談じゃないよ。あんたみたいな優秀な研究者がなんで辞めなきゃならないの。今則ちやんに辞められたらあたし困るよ、ほんと。ジステンパーウイルスの研究だってまだ途中だし、実験して書類申請して報告書書いて、学部教授や学生面倒やら、教授会やらなんちゃら委員会やら、もう一人じゃ絶対無理なんだって。

福本 それもわかってるから言い出しづらかったんですけど。

陽子 待って。頼むから。お願い。

福本 彼女から非正規じゃなくて安定した仕事についてって言われちゃって。

陽子 彼女？ ああ、マッチングアプリで知り合った人？

福本 でないと結婚は出来ないからって。

陽子 ええ？

福本 だから…ごめんなさい。

陽子 収入の安定した仕事って…何やるの。あてでもあるの？

ドアから田部が入って来る。

田部 おはようございまーす。

陽子 …誰？

福本 オオシオ製薬の田部さん。

田部 お久しぶりです。以前先生の「ジステンパーウイルスの遺伝子組み換え実験」の公開講座の時にご挨拶させていただきました。（名刺を渡す）営業の田部と申します。

福本 実は田部さんにも前から相談に乗ってもらってて。

田部 そうなんですよー。ほんとひどいですよね、十年たったら法律で正規雇用しなくちゃいけなくなるからって、福本さんみたいに優秀な方を9年で雇止めなんて、ねえ。これはなんとかしなければと思っていたんですが、ちようどうちの会社が医療用解析機器のプロモーションしてくれる人を欲しがってて。福本さんみたいに実践的な知識があって誠実で人当たりもいい人って、ほんとバツチリなんですよ。「ぜひうちの社に」って話に。

陽子 聞いてない。

福本 ごめんなさい。

田部 福本さんはこういう方だから、なかなか言いづらかったんだと思いますよ。今日私ちようどこち
らへ来る用事があったもので、私からご説明した方が先生もご安心かなーと思って。いかがでしょ
う。ここはなんとか福本さんの希望を入れていただいて。

陽子 ちよつと黙って。

田部 はい。

陽子 研究を止める気？ 本気なの？

福本 ……

陽子 研究命って言ってたじゃない。絶対後悔するよ。

福本 ……僕は先生みたいな才能はないし…。

陽子 何言ってるの。自分のやってきたことをちゃんと評価しなさいよ。

福本 ……先が見えないことが不安で…。

陽子 それは…そうかもしれないけど、でもここまで頑張ってきたんじゃない。

福本 ここんとこ眠れなくて、実験ミスったりしてご迷惑かけて…。

陽子 ミスったらやり直せばいいでしょ。考え直して。

福本 ……

陽子 あたし一人じゃやってけない。お願い。やめないで。

福本顔を上げる。その時福本の携帯が鳴る。あわてて開いた福本はまたあわてて切ってし
まう。

田部 おやあ？ 彼女かな？

福本 ……ごめんなさい！（部屋を走り出る）

陽子 則ちゃん！

田部 あらら…じゃ、私も失礼します。どうもお騒がせしました。これ、舟和の芋羊羹です。先生好き
なんですってね。ほんの気持ちです。（机に置く）どうもー。

出ていこうとするところに加賀が入って来る。

田部 あつ、加賀先生、どうも、お久しぶりでございます。

加賀 え？ 製薬会社がこんなとこに何の用だ。

田部 いえ、原先生にちよつとお話が。

加賀 お話？ なんの。

田部 いえもう、個人的なつまらないことでして。

加賀 困るね、部外者がそんなことで構内をうろうろしちゃ。

田部 申し訳ありません、もう済みましたんで。失礼します。（去る）

加賀 ったく…。よう。ちよつと頼みがあるんだけどさ。

陽子 何。

加賀　うちの研究室の学生一人こっちへ回すから面倒見てやって。
陽子　ええ？

加賀　女子学生。4年なんだけど、こいつが出来が悪くてさ。

陽子　何それ。いったん預かったら最後まで面倒見なさいよ。

加賀　俺には無理。頼むよ。な。女は女どうし。その方がいいだろ。じゃな。
陽子　ちよっと、

加賀が出ていこうとするとところへ山口と真理子が来る。

加賀　おう。

山口　あら。

加賀　あれ？（山口が真理子を連れているのを見て）なんでこいつと？

山口　学生課の人に頼まれたんです。困っている学生がいるから助けてやってってくれって。

加賀　へえ、そりゃちょうどいいや。じゃ、後よろしく。（去る）

陽子　どうということ？

山口　ご挨拶しなさい。

真理子はぺこりと頭を下げる。

山口　名前。

真理子　（ぼそぼそと）獣医学部4年、浅田真理子です。

山口　原先生、この子を先生の研究室に入れてやってくれません？　加賀先生の研究室追い出されちゃったの。

陽子　それは今聞いたけど。

山口　何か言ってた？

陽子　俺には無理だってさ。

山口　あいつ…。ひどいのよ、ほとんど卒論指導もしないまま放っておいて、出て行って追い出したんだから。

陽子　えー？　なんで。

山口　女はいらないんだって。まあ、この子が部活に一所懸命で成績が良くないのもあるんだけど。

陽子　なんであんたがそんなことやってるの？　大学と企業との連携が仕事のはずでしょ。

山口　学生課の人に頼まれちゃったのよ、あなた教授に顔が利くでしょって。他はみんな断られちゃって…。

陽子　断られた？

山口　この子すごいよ、うちのバレー部のリベロなの。チームの守護神よ。

陽子　うちの大学バレー部なんてあった？

真理子　（大声で）あります。

陽子　あ、そう。

山口 今年は東日本インターカレッジまで行ったんだから。この子の活躍で。

陽子 どうりであんまり見たことない顔だと思った。授業ずっとサボってたでしょ。

真理子 サボってたんじゃないや。

山口 遠征試合とかに行ってたのよね。もう監督が張り切っちゃって。ねえ、先生のところ学生ゼロよね、それはまずいんじゃない？

陽子 何が。

山口 学生に魅力が無い研究室って評価されちゃうわよ。

陽子 ご勝手に。

山口 ねえ、お願い。先生のところは優秀な研究員さんもいるし。

陽子 やめた。

山口 え？

陽子 たった今やめた。

山口 福本さん？ やめたの？

陽子 そう。

山口 なんで。

陽子 非正規雇用じゃなくて安定した職に就きたいんだって。結婚するから。

山口 誰と。

陽子 いいでしょ今そんなこと。

山口 良くないけど、まあいいわ。ええ？ …どこに就職する気なの？

陽子 製薬会社だって。

山口 あー…。

陽子 流行り？ 他にもいるの？

山口 まあね。えー、ひどいじゃない、ずっとあなたと一緒にやってきたのに今更…。学部生の頃からずっとあなたが面倒見て一人前にしたんでしょ。

陽子 もういいよ。加賀先生にも言われたらしい。9年で雇止めだって。

山口 あの人にそんな権限ないでしょう。

陽子 そうだけどさ。

山口 頭に来るわねー。ろくすっぽ論文も書いてないくせに威張りくさって…。でも、ということとは人手不足ってことよね。

陽子 え？

山口 研究には人手がいるでしょ。お願いします。入れてやってください。

陽子 (溜息。真理子に) ウイルスに興味あるの？

真理子 ないです。

山口 ちよつと。

真理子 だってなんか怖いじゃないすか。

山口 怖い？ (陽子を見る)

陽子 そんなことないよ。ウイルスってほんと弱っちい奴なの。熱にもアルコールにも洗剤にも紫外線にもすぐやられちゃうんだから。適切に扱えば全然怖いことなんかない。

山口 そうよ。

陽子 ウイルスって三〇億年前から地球にいるんだよ。ホモ・サピエンスなんてたった二〇万年前だよ。人間なんてウイルスにとってはほんのひよっこもいいとこ。大体ね、人間の遺伝情報の4割はウイルスから受け継いだものなんだから。

真理子 マジすか。

山口 そう。ウイルスってもう人間と一体化してるのよ。いい？ 人間の腸内には細菌が100兆個いるんだけど、ウイルスはその十倍以上いるの。だから一千兆個のウイルスが私たちの体の中にいるわけ。

真理子 ゲ。

陽子 体の中にも、空気中にも、水中にもいる。つまり人間はウイルスの深い深い森の中で生きてるんだよね。

真理子 森。

この間にホリゾントがゆっくり緑色になる。

陽子 ウイルスってなんにも悪さしない奴がほとんどだし、中には人間の健康管理をしてくれるいい奴もいる。

真理子 そうなんすか。

山口 そうよ。ウイルス学は今旬なのよ。遺伝子工学が進んで、ものすごいスピードで可能性が開けてるの。どう、魅力的でしょ。

真理子 (山口に) 詳しいすね。

陽子 昔一緒の研究室だったから。加賀先生も一緒だったんだよね。

真理子 え。

山口 そ。お二人は出世して、私は落ちこぼれたってわけ。

陽子 そういう言い方やめてよ。

山口 いいのよ。私は企業と研究者を結んでお金を引っ張って来るのが役目。そうやって研究者のお手伝いが出来ればいいの。

真理子 山口さんのいる技術移転機構って、そういう仕事なんすか。

山口 そう。

真理子 へー。

陽子 大学の運営費交付金が年々減らされてるし、少子化で学生数は減ってるし、外から金を引っ張ってこないと研究もままならないってわけ。

真理子 ええ？

山口 どう？ 面白いと思わない、ウイルス学。

真理子 うーん。

山口 悩んでる場合じゃないわよ、あなたの場合。卒論が書けなかったら退学よ。

真理子 うーん。

ノックの音。緑の明かりは消える。

麻子 ごめんください。

麻子と、その後ろから理沙が入って来る。

陽子 （ハツとして）あ！ すみません、お出迎えにいかなきゃいけなかったのに。

麻子 （にこやかに）いいえ。受付で聞いたら教えて下さったので、すぐわかりました。

陽子 ごめんなさい。

麻子 こちらこそ、お忙しいのに、この子がどうしてもおばさまに話を聞いてもらいたいって無理言つて。ほんとにお邪魔じゃないですか？

陽子 大丈夫です。あ、こちら大学の技術移転機構の山口さんです。

山口 初めまして。

麻子 突然うかがいまして申し訳ありません。

山口 いいえ。

陽子 私の兄の連れ合いで。

麻子 原です。娘です。

山口 初めまして。

麻子 ちゃんとご挨拶しなさい。

理沙 原理沙です。

麻子 もう、いつまでも子どもで…。

陽子 こっちは学部生の、

真理子 浅田です。

麻子 ごめんなさい、お仕事中でしょ？

山口 いえ、私たちは出直しますから、

陽子 お願い。行かないで。

山口 え？

陽子 山口さんはバングラデシュに行ったことがあるんですよ。

麻子 あら、そうなんですか。

山口 なに？

陽子 理沙ちゃんがバングラデシュに定住したいって言っていて、その相談に見えたの。私の古くからの友人なんです。いてもらってもいいですか。

麻子 ええ。ご迷惑でなければ、ぜひ。

陽子 そうぞおかけください。今お茶を。

山口 私やるわよ。

麻子 どうぞお構いなく。

真理子 やりましょうか。

山口 あら。いい？ じゃお願い。

陽子 ごめんね。

麻子 あの、これ、舟和の芋羊羹です。陽子さん好きでしたでしょ。(手土産を渡す)

陽子 (受け取る) あ、すみません。

麻子 いいえ。あら、そちらも？

陽子 いえあの、

麻子 ごめんなさい、ご迷惑でしたら。

陽子 いえ大丈夫です。大好物で、もう一人で五本とか食べちゃうんで。

麻子 そうですか？

山口 どうぞ。(椅子をすすめる) 私、バングラデシュは学会のイベントにくっついて一回行っただけなんです。

麻子 いつ頃いらしたんですか？

山口 もう4年前になります。

麻子 いかがでした？

山口 私はちょっと、ダメでしたね。バングラデシュって日本の北海道と東北を合わせたくらいの面積の所に1億7千万人も住んでるんですよね。もう人がウジャウジャいて、信号が無いから道路渡るのも命懸けだし、渋滞して一日中クラクションが鳴ってて、もう無理って感じでした。

麻子 信号がないって、街中で？

山口 はい。ダッカの市内です。

麻子 そうですか。やっぱりねえ。私、外務省のホームページ見て恐ろしくなっちゃってしまっ

山口 外務省？

麻子 去年ダッカのレストランで外国人をねらった襲撃事件があって、日本人が何人も亡くなりましたでしょ。

山口 ああ。

麻子 それから後も事件が続いているから、不要不急の訪問はしないようにって書いてあるんです。そんなところに定住するっていうんですよ。

山口 (理沙に) 何をしに行くの？

理沙 国際ボランティアです。

山口 JICA？

理沙 いえ、もっと小さい民間の団体です。

山口 ダッカで？

理沙 住むのは首都のダッカなんですけどー、活動するのは北東インドとミャンマーとの国境の方です。ダッカよりもっと危ない地域なんです。少数民族がいっぱいいて。

理沙 (うつむいたまま) お願いママ、あの人たちのことを悪く言うのはやめて。

麻子 何も悪くなんて言っていないでしょう。

山口 そもそも、なぜバングラデシュなの？

理沙 ー：、大学二年の時、私芸術学部映像学科だったんですけどー、進級課題で10分のショートドキュメンタリーを作らなくちゃならなくて。それで友達と何撮る？って話したら、その友達が大学のボランティアサークルに入ってたー、彼氏がバングラデシュで活動してるから、それを撮れ

ばいいって話になって。

陽子 なんの活動？

理沙 んー、少数民族の子ども達のための学校の、支援活動です。

真理子 きっかけー。

山口 浅田さんもボランティア興味あるの？

真理子 いや、自分はないすけど。

陽子 それで行ったんだ、バングラに。

理沙 はい。ダッカと、ミャンマーとの国境の方のチッタゴンというところでロケやって。それですっかりはまっちゃってー。

陽子 バングラデシュに。

理沙 はい。

陽子 何がそんなにいいの？

理沙 もう丘陵地帯の自然がすごい綺麗。手つかずの自然。あと、その少数民族の人たちって、日本人に顔が似てて。貧しくてー、電気も水道もちゃんと普及して無いけどすごくあったかーく私たちを受け入れてくれて。もうびっくり。でー、子どもたちがほんと可愛いんですよー。恥ずかしがりやなんだけど、私たちに興味深々で。ちょっと前の日本みたい。なんか懐かしい感じ。だからー、日本に帰ってきててもなんか心は向こうに置いて来ちゃったみたい。それで、バイトでお金貯めて毎年行くようになって。学校の支援も手伝って。

陽子 全然知らなかったな。もう何年も会わなかったもんね。

理沙 はい。

山口 バングラデシュって経済成長はすごいけど、民族問題は深刻よね。地域紛争もあるし、危険なことは危険じゃない？ 私はお母様が心配するのわかるけど。

麻子 ですよ。ほらごらんさい。

理沙 危ない時に危ない所に行かなければいいの。日本人も行ってる。

麻子 ダッカでしょ、日本人が行ってるのは。

理沙 丘陵地帯に行ってる人もいるの。ママは全然知ろうとしないから。

麻子 そんなことはありません。

理沙 （山口に）危ない時は現地の友達が情報をくれます。私だって絶対無理はしません。

山口 そう。友達がいるのは大事なことよね。

陽子 なんかすごいなー。理沙ちゃんがそんなすごいことやってるなんて。

麻子 ほんとに無茶なんですよ、やることです。

陽子 （理沙に）ねえ、学校の支援って言ったけど、教育を受ければ子どもたちは都会に出なくなるでしょ。結果として田舎から若い人がいなくなるんじゃないの。今の日本みたいに。その辺はどう考えてるの？

理沙 んー…。でも、少数民族の人達って、やさしいけどすごくバイタリティがあって。自然と一緒に暮らす知恵があるっていうか、そういうのって今すごく大事じゃないですか。環境問題とかあるし。だからー、マイノリティの良さを生かして世界の環境問題のリーダーになる若者を育てようっていうのが私たちの目的なんです。

真理子　すげー。

麻子　そうなれば理想的だけだね。街中はゴミだらけなんですって。

理沙　ポイポイ捨ててるのは都市部のベンガル人なの。丘陵地帯の人達はそんなことないの。何も知らないくせに。

麻子　だってネットで流れてますよ。

理沙　ネットなんてうわつらの情報だけじゃない。(陽子に) バングラデシュは国民の98%はベンガル人でそのほとんどがムスリムだから、宗教が違う少数民族の人達ってすごい差別されて、だから内戦もあったし、でも憎むのはつらいし、憎んでも変えられないじゃないですか。だから、子ども達には広い視野で学んで自分を貫いて生き抜いてほしいって。

麻子　それは政府の仕事なんじゃないの？　あなたじゃなくて。

理沙　政府が何もやらないから私たちがやるの。

麻子　政府もやらないことをなんで日本人のあなたがやらなきゃいけないの。そんな危ない所で。

理沙　誰かがやらなきゃ。

麻子　あなたは女の子なんだし。無理よ、そんな危ない所で。やめなさい。あきらめなさい、もう。

理沙　いや。

麻子　就職も長続きしなかったのに。

理沙　バングラデシュの支援はずっと続けてるでしょ。

麻子　ボランティアと仕事は違います。それじゃ生活できないでしょ？　将来のことをちゃんと考えなきゃ。

理沙　考えてる。

麻子　(陽子に) もう、夢みたいなことばっかり言ってるんですよ、ほんとに。四大の芸術学部なんかに行かせたのがいけなかったんでしょうね。パパが甘いもんですから…。

真理子　夢、追っかけちゃダメなんすか。

山口　ちよっと。

麻子　あなたのようにね、国立の理系に入って勉強するような、特別の才能がある人はいんですよ、夢を追いかけても。でもこの子はねえ…。短大出て普通に就職してれば、今頃もう結婚だって子どもだって…。

理沙　そういうのが嫌なの。

麻子　どうして？　その方が幸せじゃない。

理沙　ママの生き方を私に押し付けるのはやめてよ。

麻子　押し付けてなんかいないでしょ。

陽子　あのですね。ちよっと。国立の理系に行くのが特別な才能だっていうのは、ちよっと違うというか。

麻子　え？

陽子　私はただ研究が好きだけで、父も研究職だったし、動物が好きだからたまこっちへ来た感じ。で。

麻子　好きも才能のうちですよ。

陽子　そう、だから、誰でも自分のやりたいことにかけては力を発揮しますよね。つまり、えー、私は理

沙ちゃんの本音のところをもう少し聞きたいです。

理沙 本音？

陽子 うん。女の子がバン格拉デシュに行きたいって珍しいじゃない、やっぱり。

理沙 ：あのー、私子どもの時からずっとマイノリティだったんです

陽子 マイノリティ？

理沙 なんですけどーって不思議ちゃん扱いで。しゃべり方とか、動物がかわいそうだからお肉食べないっていうと変わってるねーとかって。学校でなんか浮いてて、いじめられやすいっていうか。

麻子 イジメ？ そんなことがあったの？

理沙 いいのそれはもう。

麻子 良くないわよ。なんと言わなかったの。

理沙 だからもういいの。大学は芸術系だから変な人が多くて楽になったし。で、就職はー、広告代理店だったんですけどー、私には合わなくて、ちょっと死にたい気持ちが強くなって。

麻子 理沙。

陽子 それでバン格拉デシュに行ったんだ。

理沙 はい。自分でもヤバいと思って。学生時代に行ったけど、もう一回行ってみようかなって。逃げじゃないけど、もう一個行き場所がほしかったから。

陽子 うん。

理沙 行ってみて、バングラの人って、すごく貧しいけど、生きるモチベーションが強いっていうか、どんな状態でも生きてる価値あるよ、生きなきゃだやってことを教わるなーって。日本は生活が潤っていても自殺する人が多いようなお国柄じゃないですか。

真理子 それな。

陽子 なるほどね。

理沙 今は自分がやれることがある場所をみつけたからー、生き易くなって。

麻子 なんで死にたいなんて。なんでママに言わなかったの。

理沙 言ったら心配するでしょ。

麻子 心配するのが親の務めでしょ。

理沙 違うよ。

麻子 ずっと親に面倒見てもらってて、なんてこと言うの。

理沙 もうあたし子どもじゃないから。

麻子 親子であることに変わりはないでしょ。

理沙 それがいやなの。自由になりたいの。

麻子 あなたは自由よ。

理沙 ママのいう自由と私の自由は違う！

麻子 何を言ってるのかわからない。もう…。

陽子 認めてあげてもいいんじゃないでしょうか。

麻子 えっ。

陽子 言うことはちゃんとしてるし。良く考えてますよ。

麻子 今のを聞いててそう思うんですか。

陽子 はい。

麻子 ええ？ 無責任なこと言わないでください。理沙が危ない目に会ったら、あなたが責任取れるんですか。

陽子 自分の行動に責任を取るのは自分自身です。理沙はもう大人ですよ。

麻子 中身はまだ子どもです。

山口 あの、お気持ち、本当によくわかります。私も母親ですから。

麻子 そうでしょう？ 私の言うことは間違ってますか？

山口 いいえ。でも子どもは親の思う通りにはならないということは骨身に染みてます。

麻子 勝手なことをいわないでください。

理沙 ママ！

山口 私も夢を諦めました。絶対何とかなると思って研究しながら結婚して出産して、でも無理でした。だから研究職はあきらめました。

麻子 そうでしょ、だから…。

山口 今でも後悔が無いわけじゃないんです。でも自分が選んだことだから納得はします。自分で選ぶしかないんじゃないでしょうか。

麻子 人の家の子をそそのかして、面白がってるんですか、あなたがたは。

陽子 いや、そうじゃなくて。

理沙 もうやめて。

麻子 帰りましょう、理沙。

理沙 いや。ママは先に帰って。

麻子 あんたは…あんたって人は私が心配で心配で病気になって死んでもなんとも思わないでしょ。もう知りません、私は。(帰り支度をする)

理沙 ママ。

麻子 勝手にしなさい。(出ていく)

理沙 ママ！

問

陽子 よく頑張ったね。

理沙 ママを傷つけるつもりなんかないのに…。

山口 大丈夫よ。親ってけっこうしぶといから。

真理子 そうなんすか。

山口 でなくて子育てなんてやってられますか。

真理子 おー。

陽子 パパは何て言ってるの。

理沙 パパも心配してるけど、許してくれた。でもパパは口ではママにかなわないから。

陽子 だろうね。

真理子 やー、理沙さんほんとすごいっす。学校の話、感動しました。自分も応援します。

理沙 ありがとう。

山口 あなたは自分のことをまず考えなさい。

真理子 はい。

山口 この研究室入るかどうかで悩んでるのよ。

理沙 そうなんだ。

真理子 自分、学部の時バレー部のことしか頭になかったから。前の研究室からは追い出されるし、もうどうでもいいやって思ってたんすけど。でもさっきちょっと何か。

理沙 何？

真理子 原先生と山口さんでウィルスのことをすげえ熱く語ってて、あ、なんかいいなと思って。

理沙 そう。

真理子 自分の研究のことあんなに熱く語る人って初めてだったんで。

陽子 ふん。

山口 でしょう。すごい先生なのよ、この人は。

陽子 やめてよ。

山口 いいじゃない。

理沙 試してみれば。

真理子 ……ですよね。先生、入れてください、先生の研究室。

陽子 え？

真理子 よろしくお願いします。

山口 やれやれ…。じゃあよろしくお願いします。

陽子 ほんとに真面目に勉強する？

真理子 はい。

陽子 いい加減なことやってたらすぐ追い出すからね。

真理子 うす。

陽子 じゃあ、一緒にやろう。(手を差し出す)

真理子 え？

陽子 何。

真理子 教授から一緒にやろうって言われたの初めてです。

陽子 どうするの。

真理子 やります！(握手する)

陽子 痛たた。

真理子 あ、すいません。(離す)

山口 もー。

山口、理沙、笑う。

暗転

第二場

2017年6月 午後

実験室。テーブルの上に実験道具が並んでいる。

陽子 ただ今からマウス皮膚繊維芽細胞の初代培養実験を行います。

真理子 願いします。

陽子 手袋。

真理子 (両手を上げる) よし。

陽子 実験器具。

真理子 (指さし確認) よし。

陽子 実験メモ。

真理子 (指さし確認) よし。

陽子 二酸化炭素注入。

真理子 はい。

真理子はスイッチに手をかけるが押せない。

陽子 早く。

真理子 はい。(押せない)

陽子 動物実験三カ条。

真理子 1, 他の方法がないか考える。1, 余計な苦痛を与えない。1, なるべく数を減らす。

陽子 で? やる? やめる?

真理子 …やります。

マウスが入っている容器に二酸化炭素を注入する。二人はマウスの様子を注視する。

陽子 取り出して。

真理子は実験台にマウスを取り出す。

陽子 二酸化炭素切って。

真理子 あ。(切る)

陽子 死亡確認。

真理子確認する。

二人はマウスに手を合わせる。

陽子 バリカン。

真理子はバリカンでマウスの背側を刈る。

真理子 こんなもんすか。

陽子 もうちょっと広く。…よし。カミソリ。

真理子 はい。

真理子はカミソリで残った毛を剃る。

陽子 消毒。

真理子 あ。(消毒する)

陽子 皮膚カット。

真理子まごつく。

陽子 ピンセットでつまんで、鉗を入れるんだよ。出来るだけ大きく切り取って。

真理子 はい。

陽子 ピンセットでなるべく組織をこそげ落として。

この間に福本がドアを開けて中をのぞき、おずおずと入って来る。実験室の窓ごしに二人を見つけ、陽子に手をふる。

陽子 (福本を見つけ、真理子に) 続けて。

陽子はデスクルームに出ていく。真理子はそのまま実験を続ける。

陽子 何しに来たの。

福本 この間はすみませんでした！ (頭を下げる) いきなり辞めてご迷惑をおかけしました。…で、その…もう一度こちらで研究をさせてもらえないかと…。

陽子 はあ？

福本 自分の食い扶持は自分で稼ぎます！ だからここに置いてください。お願いします。

陽子 たった4か月しかたってないんですけど。もう少し新しい職場で頑張ったら？ 石の上にも三年だよ。

福本 無理なんです！ 僕にはやっぱり営業は向いてないんです。もう研究室が恋しくて恋しくて…。

なんでもやりますから。お願いします！

陽子 彼女はどうしたの。

福本 別れました。

陽子 え？

福本 振られたんです。

陽子 それで戻ってきたわけ？

福本 違います！ 私を取るの、研究を取るのって迫られて、研究をあきらめることは出来ないって言ったら、じゃあサヨナラって…。

陽子 何やってるの一体。よくよく考えて決めたんじゃないかったの？

福本 そうなんですけど…。試してみても分かったというか。

陽子 生活費はどうするの。稼ぐって言ったって。

福本 自分一人ならなんとか。コンビニの早朝バイトとか家庭教師とか掛け持ちでやれば。

陽子 それと研究となんて、両立できるの？

福本 やります。

陽子 ー。(頭を抱える) そんな簡単にOKできないよ。

福本 やっぱり？

陽子 当たり前でしょう？ 相談もしないで一人で勝手に決めて、突然やめるって飛び出して、あと全然連絡も無し。

福本 ごめんなさい。怒ってると思って…。

陽子 怒るよりがっかりしたよ。ああ、そんなに信頼されてないんだって。

福本 そんなことないです。

陽子 ほんと、よく考えなさいよ。実験機材の販売だって大事な仕事じゃないの。給料も良さそうだし。

福本 その代わりどこへ行っても業者扱いで、偉そうな口をきかれる無理不尽なクレームはくるわ、それに全部ニコニコペコペコして…しまいにずっと下痢が止まらなくなっちゃって。

陽子 ええ？

福本 大学の教授ってどうしてああ態度がでかいんですかね。

陽子 そんな人ばかりじゃないでしょ。

福本 金を握ってる人間に限ってそうなんですよ。

陽子 ……。

福本 どうしても、ダメですか？

ノックの音。杖をついて足を引きずる本田が、加賀に付き添われて入って来る。

加賀 先生、気を付けて。

本田 こんにちはー。

陽子 本田先生！

福本 先生、お久しぶりです。

本田 やあ、元気にしてる？

福本 はい。

本田 いつも海外論文送ってくれてありがとうね。

福本 いえ。

陽子 お元氣そうでよかったです。今日は何か。

本田 加賀君が癌の免疫治療について新しい論文送ってくれたんでね、急にみんなに会いたくなってね。いろいろ意見させてもらったよ。

加賀 ご指導ありがとうございます。

本田 やつとこうして出歩けるようになってね。

陽子 よかったですねえ。リハビリ、頑張られたんですね。

本田 大変だったよ。この研究室も久し振りだなあ。相変わらず狭いね。

加賀 研究棟も手狭なもので。

本田 原君の実績からいったら、もうちよつと優遇してあげてもいいんじゃないの。

加賀 その辺はぜひ学長におっしゃってください。

本田 そうしよう。なんだか懐かしいなあ。加賀君と、原君と、山口君と、同期の三人がポンポンやり合
いながら研究進めていたっけねえ。

加賀 はあ。

本田 （陽子）どう、君の研究の方は。今はジステンパーウイルスだね？

陽子 はい。でも研究以外の仕事が多すぎて目が回りそうです。

本田 そうだろう。

加賀 本田先生、そろそろ。学長がお待ちですから。

本田 うんうん。（実験室へ移動）お、やってるねー。

加賀 本田先生！

本田 （立ち上がった真理子に）いいのいいの、続けて。それは何をやってるの？

真理子 マウス皮膚繊維芽細胞の初代培養実験です。

本田 ああ、基本中の基本だね。どれどれ。ああ、綺麗に出来てる。培養細胞なんて出来合いの物で済ませちゃう人も多いけど、原理を知らなければトラブルがあっても自分で解決できないからね。一昔前のやり方で原理をきちんと押さえると後がきつと楽になるよ。

真理子 はい。

本田 なんか研究してて悩みは無い？

真理子 研究は面白いし、好きです。

本田 そうか。

真理子 ただ…、「マウスの飼育なんて女の仕事だ」なんて言う人がいて。

加賀 ええ？ 誰だ、そんな時代遅れのことをいうのは。

本田 困ったもんだね。

真理子 （加賀をにらんで）自分動物は好きなんで、世話するのはいいんですけど、どうしても情が移っちゃうんで。

陽子 今日初めてマウスを殺す体験をしたんですよ。

本田 そうか。

陽子 実験動物と遊んでやつたりして、ちよつと珍しい子なんです。

加賀 そんなことじゃ研究者は務まらないよ。

真理子 （加賀に）でも、短い命でもなるべく幸せに生きてほしいし。

本田 うん。

真理子 （本田に）動物もなんか言いたいことあると思うんすよ。じーつと見てると。

本田 よく見るというのは研究者にとって一番大事な資質だ。君は研究者に向いてるね。

真理子 ほんとですか？

本田 これからは女性の研究者がどんどん活躍する時代だよ。頑張ってね。

真理子 はい。

加賀 先生、学長が待ちくたびれてますよ。

本田 そう？ ほんと？

加賀 ほんとですよ。

真理子 どうもありがとうございます。

本田と陽子、デスクルームに戻る。

福本 先生！ 実は…僕、研究室をやめたんです。

本田 ええ？ どうして。

福本 ポスドクの研究員は9年で雇止めだって加賀先生に言われて、それで…。

本田 そうなの？

加賀 いや、実は大学も大変に厳しい状況で。先生もご存知でしょう、運営費交付金を文科省が年々削ってきてまして。私も断腸の思いですよ。幸い福本君は製薬会社で医療機器のセールスの仕事について。

福本 やめました。

加賀 え？

福本 やめました。やっぱり僕は研究から離れられない。だから今日原先生にお願いに来たんです。

加賀 退職した人間が戻るはずないだろう。

福本 わかってます。だから自分でバイトして生活しますから、なんとか研究室に戻してくださいと。

加賀 そんな勝手が通るか！

本田 どうして？

加賀 え？

本田 だって、自分でバイトするなら大学の懐は痛まないわけでしょ。願ったりかなったりじゃないの。

加賀 いや、それは…。

本田 原くんはどうなの？

陽子 正直、迷ってて。

福本 戻れたら、もう絶対やめるなんていいません。

加賀 どうだかねえ。

本田 福本君が悪いよ、原君を困らせて…。

福本 すみません。

本田 （陽子に）受け入れてやってくれないかね。福本くと君には僕は本当に期待しているんだ。二人が次に何をやるか、僕は楽しみにしているんだから。

陽子 …わかりました。

加賀 ええ？

福本 ありがとうございます！

本田 それにしても文科省にも困ったもんだねえ。大学の研究費を削るなんて。

加賀 その話はぜひ学長と…。

本田 そうだ、原くんが学長になって文科省と交渉すればいい。

陽子・加賀 ええ！

加賀 ははは、しかし女性の学長なんて前例がありませんし。

本田 だからいいんじゃないか。初の女性教授、初の女性学長。ニュースになるよ。

陽子 いや、無理ですそんな。

加賀 だろう？

本田 どうして？ 考えてみたらいい。

加賀 え。

本田 学校運営が減茶苦茶で、文科省の言いなりになってるんだったら、大学憲章の精神はどうなってるんだって、自分が学長になって変えるくらいの勢いでやらないと。

陽子 でもそうするとますます研究の時間が…。

本田 それなら研究学会の会長になればいい。学会で1, 2を争うぐらいの研究者を目指すんだよ。

加賀 いやそれは、

本田 (加賀に) そう思うだろう？ 原君も少し加賀君の上昇志向を見習ったらいいい。打って出ることも考えないと。

陽子 はい。わかりました。

本田 うん。

加賀 さあ先生、行きましようか。

本田 はいはい。じゃあね。

陽子 またぜひいらして下さい。

本田は出ていく。加賀はひと睨みして出ていく。

陽子 まったくあんたって…。

福本 すみません。無我夢中でした。

真理子 本田先生ってなんか、面白い人っすね。

福本 面白いだけじゃないよ。天然痘と牛疫と両方の根絶に関わった世界でただ一人の人なんだから。

真理子 へえー。

陽子 今生きてる人ではね。日本ウイルス学会の名誉会員だよ。今でもせっせと本書いてるし。

真理子 すごいなあ。

陽子 紹介するね。福本則夫さん。前にずっとここにいた研究員さん。

真理子 初めまして。

福本 福本です。よろしくお願いします。

陽子 こっちは5年生の浅田真理子さん。彼は実験のテクニシャンだから、いろいろ教わったらいいよ。

真理子 よろしく願います。
福本 まかせて。

陽子 あと科学研究費の申請書類お願いね。実験動物使用計画と遺伝子組み換え実験許可申請書と、それから真理ちゃんの論文の英語指導も。

福本 えっ！

陽子 さっきなんでもやるって言ったよね。

福本 うー、わかりました、何でもやります！

陽子 よし！

真理子 やったー！

暗転

第三場 2017年8月 午前9時

実験室で培養器の前に立つ福本と真理子。

福本 実験結果に失敗はない。やったとおりの結果が出るだけだから、がっかりしない。いいね？

真理子 はい。

福本 じゃ、開けるよ。せえの。

培養器を開け、シャーレを取り出して調べる福本と真理子。

福本 （自分のシャーレを見て）よし！

真理子 （自分のシャーレを見て）だめだ！ なんでー？

陽子入って来る。

福本 先生、遺伝子組み換えプラスミド、できましたよ。

陽子 （見る）うん、細菌のコロニーがちゃんとできてるね。

真理子 （福本のシャーレを指して）こっちは遺伝子組み換えが出来てるってことですよね。

陽子 そうだよ。組み換え遺伝子を入れた菌が増えてるじゃない。遺伝子組み換えが出来てないと増えないように培地の薬品処理をしたんでしょ？ 真理ちゃんのは。

真理子 自分のはだめでした。同じ材料でやったのにー。

福本 がっかりしない！

真理子 くそー！

陽子 真里ちゃん、卒論の掲載紙決まったよ。

真理子 え、どこに？

陽子 日本獣医学会の雑誌だよ。ま、定番のそこ。

真理子 わー！ これでやっと卒業できるー！

陽子 今日はお祝いかな。

福本 おめでとう。

真理子 ありがとうございます！ 福本さんのおかげっす！

福本 まあ、英語に翻訳したのはほとんど僕だもんね。

真理子 いやー、ほんとっす。論文は英語で提出って言われたときはもうダメだと思いました。

陽子 ご両親にも報告したら。

真理子 そうすね。電話してきます！（出ていく）

福本、シャーレを見比べている。

福本 真理ちゃんのはなんで出来なかったんだろうなー。

陽子 実験計画書は。

福本 これです。（ページを開いて見せる）

陽子 やっぱり培地の問題じゃない？

福本 ですかね。

二人計画書を見ているところに真理子、顔を出す。

真理子 先生、お客さんですよ。

陽子 お客？

理沙が登場する。鮮やかなバン格拉デシュの民族衣装を着ている。

理沙 おはようございまーす。

陽子 理沙ちゃん！

陽子、デスクルームに移動。福本も遅れて移動。

陽子 いつ帰ってきたの。

理沙 昨日の夜。

陽子 きれいだねー。

理沙 派手すぎ？

陽子 似合ってるよ。向こうの民族衣装？

理沙 そうなの。（福本に）すみません、突然お邪魔して。

福本 いえ。

陽子 研究員の福本さん。姪なの。

理沙 原理沙です。初めまして。
福本 どうも。(動揺)

陽子 どうしたの。

福本 え？ あ、いえ。

理沙 お土産いっぱい持ってきちゃった。これおばちゃん。(布を出す)

陽子 私に？ 素敵。

理沙 きれいでしょ。少数民族の伝統の織物なの。シヨールにしてもいいし、使い方はいろいろ。これはさっきの女の子に。

真理子 電話を終えて入って来る。

陽子 真理ちゃん、お土産だって。

真理子 えっ。

理沙 はい。これ、子どもたちが学校の資金を作るために手作りしたアクセサリーなの。

真理子 えー、いいんすか。

理沙 かけてみて。

真理子、ビーズのネックレスをつけてみる。

陽子 かわいいじゃん。

真理子 おー。

理沙 あの時いた女の人にもお渡ししたいんだけど。

陽子 山口さん？ 呼んでみよう。(電話する)

理沙 (福本に) あ、すみません、ご用意してなくて。

福本 え、いえ。

理沙 これ、いかがですか？ フェアトレードの珈琲なんです。おいしいですよー。

福本 ！ありがとうございます。(受け取る。陽子とぶつかりそうになる)

陽子 どうしたの。

福本 あ、いえ。

陽子 お土産があるなら飛んでくるってさ。

理沙 よかったー。あとこれ、みんなで食べて。マンゴーバー。

陽子 ドライマンゴー？

理沙 じゃなくて、マンゴーのし梅みたいな。

陽子 へえ。

真理子 バングラデシュにマンゴーあるんすか。

理沙 まだ知られてないけどー、すつごく安くておいしいの。いろんな種類があるし。ほんととは生の方がおいしいんだけど。

真理子 マンゴー好きっす。

理沙 これは少数民族のお菓子でバルミーズ・バダム。

真理子 バルミーズ？

理沙 バルミーズはミャンマーのことで、バダムは豆。ミャンマーの豆っていう意味なの。固いけどおいしいから食べてみて。

真理子 ヘー。

陽子 こんなに沢山いいの？

理沙 うん。

福本 あの、お茶、いかがですか。

理沙 あ、ありがとうございます。すみません。

福本 どういたま、ど、ういたしまし。(冷蔵庫からお茶を出す)

陽子 学校の支援の方はうまくいってる？

理沙 いろいろ大変だけど、少しずつ。この間は子どもたち連れて海に行ったの。

真理子 海？

理沙 課外活動で。少数民族の子どもたちは村から出たことがほとんどなくて、海を見たこともないの。一度見せてあげたくて、バスをチャーターしたの。そしたら村のおばあちゃんやお爺ちゃんたちまで「死ぬ前に一度は海が見たい」って言って、超満員になっちゃった。

陽子 大人も見なかったの。

理沙 ほとんどの人は村から遠くに行ったことがないから。

福本、いろいろひっくり返している。

真理子 手伝いましょうか。

福本 大丈夫大丈夫。

理沙 もうみんなおおはしゃぎ。車に乗ったことがなくて酔う子もいたけど、全然めげないの。初体験をいっぱいして、街中で気候変動アクションもして。

陽子 気候変動？

理沙 平気で道にごみを捨てる大人が多いから、みんなでプラカード持って「道にゴミを捨てないでください」って声をあげて。

真理子 えらいなー。

理沙 自然の中で暮らしてる子どもたちだから、将来は自然を守る側に立ってほしいし。それも課外活動の一つなの。

福本 (お茶を出す) どうぞ。

理沙 ありがとうございます。

福本が理沙の隣に座ろうとすると、山口がやってくる。

山口 おはようございます。

理沙 お久しぶりです。

山口 あら！ 素敵じゃない。民族衣装？

理沙 そうです。あのこれ、叔母と色違いなんですけど、よかったら。（渡す）

山口 あらー、ありがとう。綺麗ねえ。いいの？ 私まで。

理沙 はい。

真理子 私これ。

山口 かわいー。ちよつとこれは写真撮らなきや。みんな並んで。（布を身につけて）福本さん、お願い。（スマホを渡す）

陽子、山口、真理子は理沙を中心に、布などを身につけてポーズ。

福本 撮りますよー、ハイ、チーズ。（撮る）

山口 ありがとう。（スマホ受け取る）

陽子 今向こうの学校の話を聞いてたところ。課外活動で海に行ったんだって。生まれて初めて海を見る子たちを連れて。

山口 あー。

陽子 海を見て、子どもたちはどんなだったの？

理沙 なんか急に黙っちゃってジーツと海を見てただけど、小さい波にもキャーって逃げたりして、なかなか近づけないの。でも段々慣れて、最後はもうみんな海に入ってずぶぬれになって大はしやぎ。

福本 わかります。

陽子 よかったね。

理沙 海岸でゴミ拾い競争したり、砂浜でサッカーやったりー、みんなすごく喜んで…。大変だったけど行ってよかった。ほんとうに。

陽子 生徒は何人いるの？

理沙 学校全体だと、5歳から12歳まで50人くらい。それをスタッフ6人で見てるからもう大変。

山口 6人だけ！

理沙 先生三人、調理さんが一人、マネージャーが一人、それに私。寄宿学校だからー、食事の世話とかもしなくちゃならないし。でも近所の人協力してくれるしー、ダッカ大学の学生たちがバックアップしてくれるんです。少数民族出身者のグループがあつて。時々いろんな物資を持って届けに来てくれたり。

山口 へーえ。偉いわねえ。

陽子 そういう話、お母さんにもしてる？

理沙 うん。子ども達の写真をいっぱい撮ってママに送ったり、学校の様子を書いたりして。ちゃんと読んでるみたい。あまりうるさく言わなくなった。

山口 よかったわね。

理沙 君はもっとお母さんと話をするべきだってレンに言われて。

山口 レン？

理沙 ああ、ダッカ大学医学部の学生。おばちゃんの話したらすごい羨ましがってた。

陽子 私の？

理沙 日本に留学して勉強したいって。

陽子 留学したらいいのに。そういう枠があるよ、うちの大学にも。ねえ。

山口 そうよ。海外の学生向けの奨学金もあるし、支援センターもあるし。

理沙 もう少し学校が軌道に乗ったら。今彼が抜けちゃったら活動が止まっちゃうから。

真理子 中心人物なんだ。

理沙 そう。苦勞して大学に入ったから、少数民族の子どもたちのことをとても気にかけていて、国や自治体や企業や、いろんなところと交渉して資金と人を集めて……。すーごくしっかりした人。私たちが学校を支援するきっかけを作ってくれたのも彼なの。

山口 どんな人？ 写真ある？

理沙 あります。（スマホを見せる）

陽子 （見て）うん？

山口 （見て）あらー、ツーショット。いい雰囲気じゃない。ひょっとして、彼氏？

理沙 えー、わかります？

山口 わかるわよー。（福本に）ねえ。

真理子 えー！（見る）

福本が椅子にぶつかる。

福本 痛っ！

陽子 さっきから何やってるの！

理沙 大丈夫ですか？

福本 あ、大丈夫。大丈夫です…。

陽子 しっかりしてよう…。で、理沙ちゃんはいつまで日本にいるの？

理沙 一週間ぐらい。

陽子 忙しいね。

理沙 日本に学校を支援するための仕組みを作るのが目的なの。進み具合によってはもう少し伸びるかも。

陽子 そうか。でも元氣そうなので安心した。

山口 彼氏と一緒になら大丈夫よねー。

理沙 えー。

山口 照れることないじゃない。

真理子 なんかいーなー。

山口 真里ちゃんはどんなのよー。

真理子 全然です。

理沙にメールが入る。

山口 全然ってことないでしょう、ねえ。
理沙 あ、すみません、ちょっと…。(外す)

山口は福本に声をかけようとするが、茫然としている福本を見てなんとなく事情を察する。
陽子、真理子、山口で顔を見合わせる。

真理子 ……バングラデシュ、行ってみたいな。

山口 覚悟がいるわよ。

真理子 そんなに？

山口 日本の常識は通用しないのよ。イスラム過激派もいるみたいだし。

真理子 マジすか。

陽子 経済は発展してるし、どんどん変わっていくところなんじゃないかな。

振り返った理沙は顔色が変わっている。

陽子 どうしたの？

理沙 レンからメールで、しばらく戻って来るなって。

陽子 なんて？

理沙 学校のある村で伝染病が発生したって。

陽子 伝染病？

理沙 (スマホを見て)……ナポウウイルス、だって。ナポウウイルスって何？

陽子、山口、福本が顔色を変える。

真理子 え、なんすか？

陽子 ……ナポウウイルスは1998年からマレーシアで流行した新興感染症なんだよ。始めは豚の間で広まって、それから豚を飼ってる人の間で広まった。致死率が4割でバタバタ人が死んだんで、マレーシア政府が豚を大量に殺処分して、マレーシアでは収まった。でもその過程でコウモリが元々持っていたウイルスだったことがわかって、周りの国でも調べたら、インドとバングラデシュでそれ以前から患者が出ていたことがわかったんだ。

理沙 バングラデシュのどこで？

陽子 西側のインドとの国境だよ。理沙ちゃんが行ってる所とは反対側。

山口 でもそこでは豚を介さずに人から人へ感染が広がってたのよね。致死率も70%くらいに上がって。

理沙 70%！？

陽子 そう。だから国際医療機構が2015年にナポウウイルスを「近い将来に大流行を起こすおそれのある感染症の一つ」としてエボラウイルスなんかと一緒に指定して研究を奨励してるわけ。

理沙 薬はあるの？

陽子 今のところ無い。

真理子 えっ。

理沙 でも研究はしてるんでしょ、日本でも研究してるの？

陽子 できないんだよ。

理沙 できない？

真理子 なんですか。

山口 アジアで発生した新興感染症だから、陽子はナポウィルスを研究しようとしたのよ。でもアメリカがウィルスを独占して絶対に出さなかったの。

真理子 アメリカ？

山口 アメリカはバイオテロに使われるような危険なウィルスは、発生国とアメリカしか触っちゃいけないって勝手に決めてるから。

真理子 なんすかそれ。あ、じゃ、現地で集めればいいじゃないすか。

陽子 現地の人を渡したいって言ってもダメなんだよ。アメリカはバングラデシュとか貧しい国に一杯経済援助をしてるでしょ。「言うこときかなかったら援助全部止めるよ」って言ったら現地の人だって渡せないよ。

真理子 えー。

福本 アジアで出てきたウィルスなのに、なんでアメリカが「俺たちが治す」と言ってるのかって、わけわかんないですよ。

山口 でも本田先生も止めたのよね。ナポウィルスの研究は危ないし、無理だろうって。

陽子 でもねえ、日本はもつとアジアに貢献すべきなんだよ。親戚みたいなもんなんだから。それは本田先生もわかってくれて、ずつと見守ってくれた。でも三年粘って結局ウィルスをもらえなかったから、あきらめたんだ。

真理子 えー…。

陽子 なんて研究したいと思ったかという、ナポウィルスってのはしかにそっくりなんだよ。うちの研究室ではずつとはしかのウィルスを研究してた。遺伝子からウィルスを作る技術を使って自分のウィルスを次から次へと作ってた。そうすると、遺伝子のここを変えたら病気が変わった、だからここが大事だとかわかってくる。それをナポに応用すればいいわけだから、どうしてもやりたかったんだよね。

山口 （真理子に）この研究室の技術は世界トップクラスなのよ。

真理子 すげー。じゃ、みんなで研究した方が絶対いいじゃないすか。おかしいすよ、アメリカ。

山口 そうね。でもそもそも日本にはナポウィルスやエボラウィルスみたいな危険なウィルスを研究できる施設が無いのよ。

真理子 え？

福本 ウィルスには危険度のランキングがあって、ナポやエボラは一番高いレベル4なんだけど、日本はレベル3対応の実験室までしか稼働してないから。

山口 施設自体はあるのよ。四〇年前から。それを作ったのが本田先生だったの。でも使えない。

真理子 なんて？

山口 周りの住民がウィルスが漏れたら危ないって反対したから。

真理子 えー。

福本 ウイルスなんてほんと弱いんだから、政府がちゃんと説明責任を果たせばみんな納得するんだよ。大体ウイルスで怖いのはバイオテロで盗まれることだけでしょ。だから他の国はみんな国家が施設を管理してるのに、日本は文科省が管理してる。いざテロリストに盗まれたって時に文科省が自衛隊動かして羽田空港や成田を封鎖できるかっての。

理沙 わかりました。日本にはナポウイルスは無いし、施設も無い。じゃ、私たちはどうしたらいいの？私はこの国が研究してくれたっていいです。アメリカがやってくれるならアメリカに頼みます。どうすればいいか教えてください。

陽子 研究は少しずつ進んでると思うんだけどねー。

山口 でも進み方が遅い。人も資金もなかなか集まらないから。

理沙 どうして？

山口 開発途上国の小さな村で人が何人死んだって、資金は集まらないのよ。エボラだってそうだった。ワシントンに飛び火してからのよ、資金が集まって研究が進み始めたのは。

真理子 なんとかならないんですか？

理沙 おばちゃん、助けて。…研究って、科学って何のためにあるの？ 人を救うためじゃないの？

陽子 ……。

山口 ねえ、アメリカがダメでも、他の国はどうなの？ ドイツとかイギリスとか、ウイルスを持ってる国があるんじゃないの？

陽子 ……そうだ、フランス…。

山口 フランス？

陽子 スウェーデンの大学に留学してる時のルームメイトが確かフランスのリヨン研究所に行ってた。彼女なら何か情報持つてるかも。

陽子はパソコンに取りつく。理沙は緊張から倒れこむ。

真理子 理沙さん！

福本と真理子が椅子に座らせる。

山口 （理紗を気にする陽子に）メール。（理紗にお茶を渡す）はい、飲んで。

理沙、飲む。

山口 医務室に行きましょうか。少し横になったら。

理沙 ……いいえ、大丈夫です。すみません。

メールを打ち終わった陽子が来る。

山口 送ったの。

陽子 うん。今フランス何時かな。

山口 日本の方が7時間くらい早いよね。

真理子 (スマホで調べる) 今午前2時くらいですね。

陽子 じゃあ返事が来るにしても今日の夕方以降だな。(理沙に) 他にもやれることがないか考えてみるよ。

真理子 自分も情報集めます。

福本 みんなで考えましょう。

理沙 ありがとうございます。お願いします。

陽子 少し休んで、いったん家に帰ったら。

理沙 はい。

陽子 その後何か連絡は？

理沙 (スマホを見て) あれつきり何も…。

山口 大使館に連絡してみたら。

理沙 電話してみます。(外す)

山口 陽子のルームメイトってどんな人？

陽子 セリーヌっていうんだけど、すごく優秀な研究者だった。向こうは国際共同研究も盛んだから。

山口 何か情報が入るといいけど。

陽子 ダメ元だよ。今8月だからバカンスに行ってるかもしれないし。

福本 あり得ますね。

真理子 バカンスかあ。いいなあ。

陽子 欧米の研究者って休む時は休むってはつきりしてるからね。

理沙、入ってくる。

山口 どうだった？ 大使館。

理沙 調査中だって。

陽子 そう。

陽子、振り返ってパソコンを見る。

陽子 返事が来た！

真理子 速攻じゃん！

理沙 なんて？

陽子 :「あるよ」って。

山口 ナポウイルスを持つてるってこと？

陽子 うん。「フランスは東南アジアの…:suzerain state だったから」って。 suzerain state って何だ？

理沙 宗主国です。

真理子 宗主国ってなんすか。

山口 昔植民地として統治してたってことよ。

福本 なるほど！ …え？ バングラデシュを統治してたのはイギリスでしょ？

山口 なんでもいいじゃない、とにかくあるんだから！

陽子 一緒に研究しようって。陽子たちは技術があるのに何でやらないんだらうって思ってたってき。

福本 夜中まで研究してるんですかね。

陽子 友達とキャンプに来て騒いでるんだって。

山口 さすがフランスね。

真理子 でも日本には研究室がないんすよね、その…。

福本 そうだ、一緒にやるっていつても…、うーん。

陽子 こうすればいいんだよ。(ホワイトボードに描く) フランスにはレベル4の実験室があるから、生きたるナポウィルスのRNA遺伝子から鋳型になるDNA遺伝子の部品をとるところまでフランスでやる。それを日本に持って帰って、レベル3実験室で一本に組み立てて細胞に入れられる状態にする。それをまたフランスに持って行って、生きた感染力のあるナポウィルスを合成すればいい。それなら日本でやる作業は全然危くないから問題ないよ。

真理子 ナポウィルスの人工合成ってどこか成功した国あるんすか？

陽子 無いよ。アメリカもフランスもどこも作れてない。

山口 うちが作ったら世界初ね。陽子の腕の見せ所よ。

陽子 いや、フランスには則ちゃん行って。

福本 僕？

陽子 私はバックアップに回るから。大丈夫、腕を上げてきてるから。きつとできる。

福本 はい。

真理子 えー、いいなー、私も行きたい。

福本 君の語学力じゃね。

真理子 悔しー。よし、英語勉強しよう。

陽子 そうだね。真理ちゃんもじきにきつと行けるよ。

真理子 はい！

山口 これで科学研究費取りましょう。申請手続きは手伝うわよ。

福本 助かりますー！

陽子 (理沙に) ナポウィルスの人工合成ができれば研究は飛躍的に進むよ。みんなでがんばるから、理沙ちゃん。

理沙 …助けてくれるの？

陽子 うん。

理沙は陽子に抱きつく。

理沙 …ありがとう。

福本 そうだ、本田先生に共同研究者になってもらったらどうですか？ 研究費取りやすくなるんじや。

真理子 えー！

陽子 則ちゃん。そんなこと考えてるならフランス行きは無しだよ。

福本 え。

陽子 有名な人の名前入れて研究費取ろうなんて…。私がそういうの嫌いなもの知ってるでしょ。

福本 でも研究費が取れなくちゃ…。

陽子 研究者なら研究で勝負しなさいよ。

福本 はい。…ごめんなさい。

山口 そうね。正々堂々で行きましょう。大丈夫よ。（陽子に）でも一応本田先生にはお知らせして置いた
ら？ 心配されるかもしれないから。

陽子 そうだね。

パソコンで科学研究費のページを開く福本。のぞきこむ山口、真理子、理沙。
陽子は電話をかける。

陽子 ……もしもし、本田先生のお宅ですか？ 原です。はい。先生いらっしゃいますか？

舞台の一方に本田の姿が浮かぶ。

本田 はい。原君？

陽子 はい。朝早くすみません。今よろしいですか？

本田 うん。どうしたの？

陽子 実はフランスの研究者とナポウイルスの共同研究をする話が進んでまして。

本田 え？ ナポがあつたの？

陽子 はい。リヨン研究所が持つてました。

本田 そうか、リヨンにあつたのか…。盲点だったな。

陽子 他から情報が伝わったら、また先生にご心配をかけると思って、先に。

本田 ……僕が反対したのは覚えてるね。

陽子 はい。

本田 ナポウイルスは非常に危険なウイルスだ。研究者にとつても。でも、ナポウイルスをやるのは君の
長年の夢だったね。それは今も変わらない？

陽子 はい。

本田 そうか…。僕はもう何も言う立場にはない。君たちの研究にはハラハラさせられるけど、ワクワク
もするんだ。僕はワクワクンは頑張ったけど、生きたRNAウイルスの合成なんて僕の時代には考え
られなかったからね。ほんとにすごいよ。ただし、くれぐれも気を付けて。

陽子 はい。

本田 僕で何か協力ができることがあつたらいつでも言ってくれ。いい結果を待ってるよ。

陽子 ありがとうございます。失礼します。（切る）

本田の姿は消える。

山口　なんて？

陽子　いい結果を待ってるって。

山口　そう。

福本　山口さん、この科研費のスケジュール見てくださいよ。

山口　はいはい。

陽子を残り気味に

暗転

第四場　2018年1月　夜8時

真理子はパソコンに向かって報告書類作成。陽子と福本は実験室で実験中。

加賀がやってくる。

加賀　よう。

陽子　あれ？　どうしたの。

加賀　どう、進み具合は。

陽子　則ちゃんは引き続きナポウイルスの全遺伝子をつなぐ作業中。ウイルス合成用の補助蛋白質の遺伝子の方は、スクレオカプシドとリン酸化タンパク質は出来た。あとはラージ蛋白質だけど、それも用途は立ってる。

加賀　肝心のウイルスの遺伝子ができないんじゃない？。

陽子　ナポウイルスは塩基の数が一万八千個もあるんだよ。それを全部順番を間違えないようにつなぐんだから。

加賀　一回目に合成に失敗した理由ははっきりしたのか。

陽子　多分遺伝子の尻尾の部分の配列の違いだと思う。

加賀　フランスのレベル4実験室の使用期限は今月中なんだろう？　間に合うのかよ。

陽子　間に合わせる。

加賀　華々しく国際共同研究なんか立ち上げて：うまくいかなかったら大学全体の恥になるんだからな。わかってるのか。

陽子　わかってる。うまくいけば大学全体の名誉になるよ。

加賀　：ふん。

陽子　ふん。

加賀出ていく。

真理子 人の邪魔しかできんのかあいつ！。

陽子 気になって仕方ないんじゃない。(肩を回す)

真理子 福本さん、全然動じないすね。

陽子 すごい集中力。

真理子 さすが。コーヒー入れます？

陽子 いいいい。自分でやる。なんとか整理ついた？

真理子 とりあえず経費は全部分類してフォーマットに打ち込みました。でもまだ請求書送ってこないところがあるんですよ。請求書ないと文科省に報告書出せないから早くしてくれって言ってるのに。(パソコンに) 金払わねーぞもう。

陽子 まあまあ。

真理子 この実績報告書の項目の細かさ、なんとかならないすかね。

陽子 元々文科省が財務省からうるさく言われてそうなるみたいよ。

真理子 勘弁してほしいわ。

陽子 真理ちゃんも一休みしたら。

真理子 はい。

真理子、コーヒーを注いで座る。

真理子 …前から聞きたかったんですけど、陽子先生はなんでウイルスの研究始めたんすか。

陽子 たまたまだよ。

真理子 たまたま？

陽子 高校で生物と化学が好きだったから、なんとなく理系の大学入ったんだけど、難しい化学式とか嫌いでさ。動物が大好きで生き物に触りたかったから、いろんな生物系の研究室回ったんだけど、どこ行っても「女性が研究者になっても就職は無いよ、来ない方がいいよ」ってけっこうはつきり言われたの。

真理子 私と同じだー。

陽子 うん、もう門前払い。で、獣医学専攻を見に行った時、たまたま出てきた先生が「獣医学面白いよー」って言ったんで、「どこでも女性に就職口は無いって言われるんですけど、どうですか」って聞いたら「そんなのいっぱいあるよー」って言われて、じゃもうここにしようって。

真理子 で、獣医に。

陽子 でもね、獣医って経済動物のためにできた学問だから。

真理子 え？

陽子 牛とか馬とか鶏とかね。売ってお肉にするか卵を産むかミルクを取るかで成り立ってるんで、それが病気になった時、今後儲かる分より治療費の方が高いとわかったら農家の人はどうすると思う？

真理子 えー…。

陽子 「先生殺して」ってこの一言だよ。殺すのは獣医師の役目なの。

真理子 そうなんすか？

陽子 え？って感じでしょ。それはやだなと思って、でもまた悩んで。人間の医者の方が良かったかなーとかね。その時に、また授業で免疫学習って、抗原抗体反応とか、細胞免疫とか、人間の体を守る仕組みってなんてすごいんだろって思ったのね。だから基礎からみっちり免疫学やろうと思って研究室に入って、はまっちゃったのよ、面白くて。だけど、博士課程に行く時に先生に「ドクターに行くなら就職は絶対面倒見ない。面倒見る自信が無い。だからうちの部屋には来るな」って言われたの。

真理子 またー？

陽子 男子には「絶対来いよ」っていうんだよ。女子には言わない。だから「いいです、別にラーメン屋の前でもなんでもやって働きますから」って言って入れてもらってね。自分一人食べてく位な位なところかならう、研究者としてやっていけるかどうか、三年間やってみようって。でもその先生、一年で外国に行っちゃったの。

真理子 え！

陽子 だから指導してくれる人もいなくなって。まだ何もわかんないのにどうしようって、怖くて怖くてしょうがなかった。でも生き残るために、半年に一回ある小さな学会で発表はしてたの。自分で考えて。したらその中にもものすごくいい質問をしてくれるおじさんがいたのね。質問するだけじゃなくて必ずサジェスチョンしてくれる。「それだったらこういうのやった方がいいですね」とか。あー、なんとかしてあの人に指導してもらいたいと思ったけど、わかんないでしょ、どうしたらいいか。したらドクター一年の時にその人がたまたまこの大学に移ってきたんだよ。それが本田先生。

真理子 そうなんだ。

陽子 それで、一度お話ししたいって言って、自分の研究論文持って「どう思いますか」って聞きに行ったの。したらすごく丁寧にノート取りながら話聞いてくれて、「これはいいテーマだけど、博士課程の子が一人でやるようなテーマじゃない」とか、一個一個コメントしてくれたのね。「一人でやるならここらへんがいい」とか。うれしかったなあ。

真理子 本田先生、神！

陽子 うん。で、終わって「ありがとうございます」って言ったら、先生が「僕移ってきたばかりで、博士課程の学生がいないので、僕の研究室に移りませんか」って。えー！って感じだったけど、とにかく指導してくれる人がいるといいじゃないや大違いだから、思い切って移って。そこからだよ、本田先生の専門がウイルスだったから、免疫につなげてウイルスをやるようになったの。

真理子 そこからすかー。

陽子 だから私は博士号取ったのは本田先生の研究室。そこで研究員になって、助手に採用してただいて、翌年には留学。日本に帰ってからは私は別の研究室に移って、そこで教授になったんだけど、研究室を移るまではほんとにお世話になりました。

真理子 すごいなー、本田先生。でもそれ、陽子先生の時から今まで女性差別は全然変わってないってことスよね。

陽子 うん。

真理子 ひどくないすか。

陽子 もっと私たちが声をあげていかないと。

真理子　なんで差別されてる側がそんながんばらなきゃいけないんですか。おかしいすよ。

陽子　少しづつ良くなってるよ。

真理子　えー。

陽子　私がこの大学入った時は理系の女性の教授って一人もいなかったんだよ。今はいるでしょ。

真理子　（陽子を見て）…そうっすね。よし、私も頑張ろ。

陽子　おっと、もうこんな時間か。そろそろ終わりにしよう。

真理子　もうちょっとで一区切りします。

陽子　（研究室の福本に）則ちゃん、もう8時半だよ。

福本　…。（集中している）

陽子　則ちゃん。

福本　え？　はい。

陽子　もう遅いから、あとは明日にしたら。

福本　はい。あと少しで終わらせます。

陽子はデスクに行って書類を見る。うつらうつらし始める。

ホリゾントが緑色になる。本田がホリゾントに出てくる。

本田　ウイルスにはいいウイルスと悪いウイルスがいる。

陽子　先生…。

本田　細菌には善玉と悪玉があるだろう？

陽子　はい。

本田　善玉の例は？

陽子　発酵を起こす酵母とか、ヨーグルトに含まれるビフィズス菌とか。

本田　そうだ。悪玉は？

陽子　病気を起こす細菌ですね。

本田　うん。ペストや結核や、さまざまな病原菌だ。じゃあウイルスはどうだろう。

陽子　いい悪いって、それは人間から見てることですよ。

本田　その通り。本当は細菌もウイルスもいい悪いなんて関係ない。自分の子孫を残していくために住みやすい場所を探していくだけのことだ。だが中には細菌と同じように人間の役に立ってくれるウイルスもいる。

陽子　バクテリオファージとか？

本田　そうだね。細菌を食べるバクテリオファージというウイルス。これは二〇世紀の初めに赤痢菌に對してめざましい効果をあげた。

陽子　でもバクテリオファージによる治療法はまだ確立していません。

本田　うん。でも、その他にも、植物を熱に強くするウイルス、チューリップに綺麗な模様を作るウイルス、人間の遺伝子に組み込まれて人を守っている可能性のあるウイルスなど、次々に新しいウイルスの機能が発見されている。我々はまだウイルスの不思議の森のとは口に立ったにすぎない。

陽子　…先生が言いたいのは、ウイルスによる病気の治療にウイルスを利用することができるかもしれない

ないってことですか？

本田 二〇世紀はウイルスの根絶を目指した時代だった。二一世紀はウイルスと共に生きる時代になるだろうね。

陽子 そんなことができるんですか？

本田 ウイルスには独特の「生」と「死」があるからなあ。

陽子 先生！

本田 ほんとに不思議な生命体だ…。(消える)

机に突っ伏している陽子を真理子がゆすり起こす。

真理子 先生？

陽子 ん？

真理子 もう帰って下さい。あと福本さんと私で締めときますから。

陽子 うん…。

真理子 なんかうなされてましたけど。

陽子 そう？ …本田先生とね、話してた。

真理子 夢の中で？

陽子 うん。ウイルスには善玉と悪玉がいるって話。

真理子 え？

陽子 人間にとって役に立つウイルスもいるって。そう言われてなんかぞわつとしたんだ…何か忘れてることがあるみたいな…。

真理子 え、それ、すごいヒントかも。

陽子 うー、何だったろう…。

研究室の福本、PC持って出てくる。

福本 先生。

陽子 終わった？

福本 できました。

陽子 できた？

福本 ナポウウイルスの全遺伝子をつなげました。

三人はテーブルへ。

福本 (パソコン画面を見せる)これが遺伝子配列の解析結果です。全長が18246塩基、6の倍数になっってます。

陽子 元の遺伝子配列と比較してチェックした？

福本 はい。これが比較対照した結果です。(ウィンドウを開く)

真理子 誤差、0。やった！　すごい福本さん！

陽子 おめでとう。これでフランスに行けるじゃない。今度こそナポウウイルスを合成してきてよ。

福本 はい。でも他の条件もいろいろあるから…。

陽子 大丈夫、それはこれから一緒に整理しよう。真理ちゃん、渡航手続き手伝ってやって。

真理子 はい！

陽子 いろいろあるけど、あとは明日だ！

真理子 祝杯あげます？

陽子 いいね。真理ちゃんもお腹すいたろ。

真理子 ペこぺこっす。そういえば、お昼も食べてないかも…。福本さんも食べてないでしょ。

陽子 おごるよ。

真理子・福本 やったー！

陽子 さあ、片づけて出よう。

一同が支度にかかるところへふらりと理沙が現れる。

福本 あれ？　理沙さん。

陽子 どうしたのこんなに遅く。

真理子 すごいんですよ、福本さんがナポウウイルスの全遺伝子のつなぎ合わせに成功したんです。いま

からお祝いにっこうって…。

理沙 薬？　薬が出来たの？

陽子 じゃなくて、ナポウウイルスの全遺伝子配列を再現したの。

福本 フランスに行って、今度こそ生きたナポウウイルスを合成してきます。そうすれば…。

理沙 薬はいつできるの？

福本 いつとは言えないけど、ウイルスの感染の仕組みがわかればそこから…。

理沙 薬！　いるのは薬なの！　なんでまだできないの？　研究研究って、もう半年もたってるのに何

やってるのよ！

陽子 ちょっと落ち着いて。

理沙 レンが感染したの！　…高熱を出したって…。隔離された家族の支援をしてたから、そこからき

っと感染したんだ…。村ではもう一〇人以上死んでる。学校に通ってたダイリンが死んで、ダイリ

ンのお父さんとお母さんも死んで、妹たちも感染して。今度はレン…。レンが死んじゃう。

理沙…。

陽子 村へ行く道路は軍隊が封鎖しちゃったから、彼をダッカの病院に連れてくることも出来ないの。

ろくな設備もない現地の病院でただ寝てるだけ…。どうすればいいの。

陽子 …感染したからって全員死ぬわけじゃないよ。必ず何割か回復する人もいるんだ。レンは若いんだし、持ちこたえるよ。なんとか方法を見つけよう。

理沙 レンの薬は？

陽子 理沙…。

理沙 薬！　薬がほしいの！　どこにあるの！

福本 理沙さん…。

陽子 理沙ごめん。本当にごめん。基礎研究ってすぐには役に立たないんだ。でも大事なんだよ、とっても。そこからいろんなことがわかってくる。必ず治療法につながる。だから、…ごめん。もう少し待って。

理沙はうなだれる。陽子椅子に座らせる。

福本 くそー、もっと早く研究を始めていけば…。ウイルスの運び屋がコウモリだってことまでわかってたのに。

陽子 ウイルスの運び屋…？

福本 そうですよ。

陽子 運び屋…運び屋…。それだ。

真理子 何ですか。

陽子 善玉ウイルスだよ。

福本 え？

陽子 はしかのウイルスワクチンを運び屋に使うんだよ。遺伝子組み換えでナポウイルスの抗原だけを乗せた運び屋を作ればいいんだ。

福本 そうか！

真理子 どういうことですか？

陽子 (ホワイトボードで図解しながら) はしかのワクチンって、一回うつたら何十年も免疫が続くくらいものすごく防御力が高いんだよ。しかも世界中で使って安全性は保障されてる。その上ナポウイルスと構造がそっくりなの。だから、はしかのワクチンの膜にナポウイルスの抗原だけ遺伝子組み換えでくっつけて細胞に入れば、細胞の免疫が誘導されて「あ、はしかのウイルスが来た」って攻撃する。次にナポウイルスが来ても「あ、また来た」って言って攻撃する。つまりナポに対する強い細胞性免疫ができるようになるんだよ。

福本 偽物を入れて、本物に対する防御力を強めるってことだ！

陽子 そう。

真理子 そういう例があるんですか。

陽子 組み換えウイルスワクチンは、天然痘やカナリア痘で例があるんだよ。それをナポのウイルスワクチンに応用すればいい。

福本 それできたらすごいですよ！ ものすごく応用範囲が広いじゃないですか。

真理子 でもワクチンって予防ですよ。すでに感染した人には？

陽子 ……新興感染症の一つのラッサ熱で、感染した研究者が、回復傾向にある患者の血清を注射して助かった例がある。

真理子 じゃあ、

陽子 たまたまだよ。その時は助かったけど、患者の血清にウイルスが残っている可能性もあった。かえって症状が悪化する可能性もあった。リスクが高すぎて、治療法としては確立してない。…でも、とにかく感染の拡大を押さえないと。ワクチンの開発と、ウイルスそのものの研究と、並行して進

めていくしかない。
福本　そうですね。

麻子が飛び込んでくる。

麻子　理沙！

理沙　ママ…。

麻子　やっぱりここだったのね。心配させて、この子は。

陽子　レン君が発病したと。

麻子　そうなんです。それでがつくり来て、しばらくしたらいなくなってたんで、もうどうしようかと…。

陽子　薬がほしいと言って。薬自体はまだできていないんですが、ワクチンの開発については手掛かりが得られました。理沙、すぐに薬ができなくてごめん。でも、私たちも必死でがんばってるんだよ。それはわかってほしい。

理沙　…いつまで待てばいいの？

陽子　それは…。

麻子　しっかりしなさい。あなたがしゃんとしないでどうするの。理沙は理沙の出来ることをやりなさい。いい？

理沙　…うん。

陽子　大丈夫？

理沙　はい。

麻子　さあ、帰りましょう。

福本　僕、送ってきます。

陽子　お願い。

麻子　ありがとうございます。失礼します。

理沙を支えて、麻子、福本は出ていく。

陽子　がんばろう。私たちはチームだよ。

真理子　はい！

陽子　そうだ、ワクチンのアイデアのこと、本田先生に連絡しよう。

真理子　夢に出てきたってことも？

陽子　そうだね。

真理子　きつとすごい喜びますよ。

加賀が現れる。

加賀　本田先生だと？

陽子 ああ、ナポウィルスの全遺伝子、つなぎ合わせに成功した。これでフランスに行ける。間に合ったよ。

加賀 先生がどうしたって。

陽子 ワクチンのヒントも見つかったんだ。それで先生に、

加賀 本田先生は亡くなった。

陽子 え…？

加賀 一週間前に。身内だけで葬儀もすませたって、大学に今連絡があった。

間

陽子 そんな…。

加賀 お前のせいだぞ。

陽子 え？

加賀 お前がまたナポウィルスなんかに関わって心配かけるからだ。

真理子 何言ってるんですか。本田先生は励ましてくれたんです。ねえ。

加賀 励ます？

陽子 またナポに取り組むことは電話でお伝えした…、いい結果を待ってる、手伝えることがあったらなんでも言ってくれて…。

加賀 いい結果！ お前はいいよなあ。最後まで先生に期待されて。

陽子 ええ？

加賀 おれは一度も期待しているなんて言われたことが無い。研究室の頃から一度も！ 俺にはまだ先生の力が必要だったのに…。

陽子 そんなこと言ってるからダメなんだよ、あんたは。

加賀 なに？

陽子 研究者なら誰かにすがったりしないで自分の足で立ちなさいよ。

加賀 お前にはわからないんだ。比べられる苦しさか。いいか、もう少しで俺の研究も結果が出るんだ。どっちが研究者として上か、こんどこそ決着つけてやるからな。

陽子 はいはい。楽しみに待ってますよ。

加賀 見てろよ。

加賀は出ていく。

真理子 やなやつー。

陽子後ろを向く。

真理子 大丈夫ですか？

陽子 先生…！

陽子、泣いている。
暗転

第五場 2019年6月 17時頃

デスクルームに陽子、真理子、理沙、山口、田部がいる。

陽子 (田部に) なんで金が出ないの！

田部は肩をすくめる。

陽子 福本くんがフランスに行ってナポウウイルスの合成に成功した。はしかのワクチンを遺伝子改変してナポウウイルスのワクチンも出来た。動物実験も成功した。ハムスターでもサルでも、ワクチン打ったやつはウイルス入れても発病しない。ピンピン元気。有効性は実証された。でも製品としての薬にならないれば患者に届けることは出来ない。どこの製薬会社も金を出さない。なんで？ もう一〇社以上あたってたけど全部ダメ。田部さんとこみたいな大手こそ研究開発にお金を出してしかるべきじゃないの？

田部 弱りましたね…。先生の研究は素晴らしいですよ。ほんとすごい。それは分かってるんです、重々。

陽子 だったら、

田部 待ってください。先生、そのワクチンで毎年何本売れるんですか？

陽子 今の感染状況から言うと、百本単位かな。

田部 バングラデシュ政府が高く買ってくれるんですか？

陽子 いや、高くてわけには、

田部 無理でしょう。先生、新しい薬っていうのはね、すごいきれいで安全でっていうのをいっぱい証明しなくちゃいけないんですよ。橋渡し研究、トランスレーションナル・リサーチっていうんですけどね。まず治験ですよ。第一相の臨床試験、第二相臨床試験やって、審査受けて、承認されるまで十二年から十五年かかるんです。費用も50億円くらいかかりますよ。

真理子 50億ー？！

田部 それだけかけて年100本しか売れないじゃ…。先生ね、うちの社員にも、養わなきゃいけない家族さんがいるんです。うちは受けられませんか。他の製薬会社さんも同じだと思いますよ。申し訳ないけど。

陽子 だけどね、ナポウウイルスの感染者が出てるのはアジアだよ。こんな危険なウイルスが日本の目と鼻の先にいるんだよ。それだけじゃない、ナポウウイルスの自然宿主はフルーツバット、果物を食べるオオコウモリだけど、その生息範囲は世界中の温暖な地域に広がってて、日本の与論島と沖縄も入ってるんだよ。今みたいな気候温暖化が進んで行ったら、どんどん生息範囲が北上していく可能性だってある。今のうちにきちんと研究を進めて行かないと。いつ感染爆発が起きたっておかし

ないんだよ。

田部 わかってます。わかってます。だからそういうことはね、国際機関に任せておけばいいじゃないですか。一企業ではとても対応できませんということを申し上げているんです。

陽子 （田部に詰め寄る） そんな金のある国際機関がどこにあるの！

山口 死の谷だわね。

陽子 死の谷？

山口 valley of death。開発されたものと製品化までの間に横たわる谷のことよ。ほとんどの研究者はこれを越えられない。製品化されずに埋もれていく研究は山程あるわ。

田部 良くご存知で。

真理子 そんなこと教科書のどこにも書いてないつすよ。

山口 アメリカの教科書には書いてあるそうよ。

田部 さすがアメリカ。

理沙 あの、もしニューヨークで感染が始まったら、製薬会社はお金を出しますか？

田部 それは出すでしょうね。

理沙 たとえ人数が少なくても？

田部 はい。アメリカはお金持ちですから。

理沙 私は今、クラウドファンディングでナポウイルス感染者やその家族を助けるための支援金を集めているんです。でもなかなか集まりません。私のやり方が悪いからかもしれないけど。でも一方では、最高の医療で助けてもらえる人もいますよね。それは本当に正しいことなんでしょう。

陽子 正しいわけではないでしょ。命の重さはみんなおんなじだよ。貧困国の感染症を放っておいたらいずれ先進国にも火の粉が降りかかってくるし。

田部 そうかもしれませんね。

陽子 それで平気なの？

田部 そういう問題じゃないでしょう。会社の方針を私が決めてるわけじゃないんですよ。

理沙 でも私よりは会社の偉い人に近い所にいるじゃないですか。お願いです。なんとかお金を出してくれるように頼んでください。

田部 無理ですって。一介の営業マンですよ私は。

真理子 そこをなんとか。

田部 勘弁してくださいよ。言ったでしょ、結論は決まってるんです。

理沙 ：私、一体何と闘っているんだろう。今までウイルスと闘ってるんだと思ってたんだけど。

山口 もうやめましょ。とにかく研究は続けましょ。いずれ何かの形で役に立つときがきつと来るわよ。

理沙 薬にするのはあきらめろってことですか？

山口 今は仕方ないでしょう。

真理子 山口さん！

山口 他にどうしようがあるっていうの？ 冷静に考える事も必要よ。

理沙 私はレンに何て言ったらいいんですか？ みんな薬を待ってるんですよ？

山口 それはそうだけど。

田部 そうそう、うちは今度ビッグ・プロジェクトに取り組むことになったんですよ。ねえ、先生。

少し前から一同を見ていた加賀が入って来る。

加賀 よう。

陽子 どういうこと？

田部 近赤外線を使った癌の治療法の新しい薬を加賀先生のグループが開発されたんです。

真理子 えっ。

加賀 光免疫治療法ってやつだ。癌細胞に特異的にくっつく抗体と、赤外線で活性化する抗がん剤をくっつけたのさ。

田部 癌細胞だけを殺す治療法ですよ。癌患者が世界中に何人いると思います？ みんな飛びつきますよ。ものすごく将来性があります。それでうちの会社と加賀先生の研究室とが提携して治験をすることになったんです。

加賀 これが学問の大道じゃないのかい、原君。世界の片隅の小さな感染症にかかざりあつてゐる暇があったら、もつと多くの人に関わる研究をすべきだ。その方が金も集まるさ。バングラデシュに必要なのは特殊なワクチンじゃなくて、まともな政府と医療だよ。そっちの方がよっぽど多くの人を救えるんじゃないの。

真理子 ナポウィルスの感染者は放っておけてことですか。そんなの、

陽子 真理ちゃん。(加賀に) おめでとう。

加賀 ありがとう。

陽子 ただね、ナポウィルスは決して小さい感染症ではないよ。今は接触感染が主だけど、飛沫感染能力を獲得したら恐ろしいことになる。だからWHOが重要感染症に指定したんじゃない。

加賀 まあ、がんばってよ。田部君、長居は無用だ。

田部 じゃあ、そろそろ私は失礼します。お役に立てなくて残念です。ほんとですよ。(立ち上がる)

陽子のスマホに福本から電話が来る。

陽子 則ちゃん？

舞台の一方に福本の姿が浮かぶ。宇宙服のようなものを脱ぎながら話している。

福本 先生、資金提供の件ですけど。

陽子 資金提供？

福本 製薬会社の方はどうですか。

陽子 ダメ。見込み無し。

福本 そうですか。INFEIDって知ってますか？

陽子 インフェイド？

福本 I、N、F、E、I、DでINFEID。International Fund for Emerging Infectious Disease 〇〇

大金持ちのギル・ベイツとかが資金提供して作った基金で、貧しい国の新興感染症の研究にお金出してくれるそうです。

陽子 え！

福本 対象はラッサ熱とマールブルグウイルスとナポウイルス。

陽子 ナポウイルス？

福本 ネットで調べてください。セリヌから言われたんです。なんでこれに応募しないのって。

陽子 わかった。調べる。

福本 ただ条件が厳しいんですよー。5年で臨床試験の第二相まで行かなきゃいけないんです。

陽子 ええ？

福本 難しいですよ。

陽子 とにかく調べてみるよ。ありがとう。

福本 じゃ、いったん切りますよ。

福本は消える。陽子はパソコンに向かう。

真理子 なんです。

陽子 ギル・ベイツがナポウイルスの研究に金を出すらしい。

真理子 え！

加賀 ギル・ベイツ？

陽子 INF E I D っていう団体で…あった。これだ。

真理子 （読む）イギリス、フランス、インド、ギル・ベイツ財団、およびサピエンストラストの出資によつて2017年に発足した、公的機関、民間機関、慈善団体および市民団体の間でのグローバルなパートナーシップ。新興感染症に対するワクチン開発を促進して将来的な流行に備えることを目的とした団体です。すごい！

田部 へえ、そんながあるんですか。

理沙 応募しましょう！

陽子 ただし条件があつてね。5年で臨床試験の第二相まで行かなきゃいけないらしい。

田部 ええ？

田部と加賀が嘖き出す。

真理子 何がおかしいんすか。

田部 失礼。でも悪い冗談でしょうそんなの。

加賀 馬鹿馬鹿しい！

真理子 やつてみなくちゃわからないじゃないすか。

田部 製薬会社がどこも協力しないのに、どうやって臨床試験やるんです。

真理子 に、日本がダメなら外国の製薬会社に頼めばいいんですよ。

加賀 どこも引き受けないよ。

陽子 応募しよう。

真理子 先生！

田部 本気ですか。

陽子 他に方法がないもの。

加賀 頭を冷やせ。無理に決まってるだろう。

陽子 どうして。

山口 加賀先生が正しい。あんたは国際的なライセンス取得の難しさを知らないからそんなこと言われるのよ。しち面倒くさい書類を全部英語で作って、いろんな国の政府と会社と交渉して、現地調査もやって、日本の何倍も厳しい審査を潜り抜けなきゃならないのよ。しかもものすごい数の世界中の研究チームと競争しながら。

加賀 東大ならいざ知らず、うちみたいな二流の大学の出る幕じゃない。あきらめるんだな。

陽子 いやだ。

山口 5年で臨床試験第二相なんて無理よ。

陽子 こんなチャンスは他にないんだから。5年だけもらって行けるところまで行けばその後誰かがなんとかしてくれるかもしれないじゃない。

加賀 契約不履行で訴えられたらどうするんだ。

陽子 そんな時はそんな時。

加賀 馬鹿！

陽子 バカでけっこう。

加賀 大学が攻撃されることになるんだぞ。

山口 私は手伝わないわよ。ダメに決まってるものにかかる時間なんかないわ。

陽子 いいよ。

真理子 山口さん！

山口 (真理子に) あなたもよく考える事ね。(出ていく)

加賀 ついに仲間割れか。ま、頭を冷やすんだね。(出ていく)

田部 (溜息) 私も山口さんのおっしゃる通りだと思えますよ。じゃあ、失礼します。(出ていく)

真理子 …先生…。

陽子は福本に電話をかける。

陽子 則ちゃん？

福本の姿が浮かぶ。

福本 はい。どうします？

陽子 応募するよ。INFELD。

福本 そうこなくっちゃ！

陽子 ただしセリーヌの全面的な協力が必要なんだ。日本の製薬会社はあてにできないから。

福本 セリーヌは協力するって言ってますよ。先生、ワクチン・ディベロップメント・サポート・オーガナイゼーションって知ってます？

陽子 いや。何それ。

福本 ワクチン開発支援機構。貧しい国の開発研究をするようなチームを助けてくれるNPOがあるんだそうです。セリーヌがそこ話をつけてくれるって。

陽子 そんなのがあるの？

福本 詳しいことはまた連絡します。じゃあ。

陽子 わかった。(切る)

福本消える。

理沙 おばちゃん…？

陽子 大丈夫。セリーヌが全面的に協力してくれるって。他にもいろいろ助けてくれる人がいるってさ。

理沙 ほんと…？

陽子 うん。

理沙 ありがとう。(理沙は陽子を抱擁する)

真理子 やりましょう、先生。

陽子 さあ、忙しくなるよ。

真理子 はい。

第六場 2019年12月 夜

研究室で山のような書類のチェックをしている陽子と福本と真理子。

福本 (一覧を見ながら) 書類番号三一、バングラデシュ政府の入域許可書。

陽子 これ。(差し出す。真理子がファイリングする)

福本 チッタゴン管区の許可書。

陽子 ある。

福本 パスポートのコピー。

真理子 あります。(ファイルする)

福本 書類番号三二、イタリアの製薬会社の承認書。

陽子 はい。…こっちは全部そろってるよね。

福本 はい。あと一次、二次、三次の審査報告書の束がありますけど。これも一応チェックします？

真理子 もう見るのも嫌。

福本 先生、もうインフェイドに書類は送っちゃったんだから、今更チェックしてもしょうがないんじゃないですか。

陽子 だから今のうちにファイルして整理しておかないと。また何か書類の差し戻しがあるかもしれないな

いし。

真理子 地獄のエンドレスループ。

福本 十一月末には採択発表、出るようになってたんですね。

陽子 なんか遅れてるんだよ。

真理子 なんでだよー。

陽子 さあ。

福本 セリースにもわかんないんですか？

陽子 うん。応募数が多いからじゃないかって言ってた。300本くらい出たからね。

真理子 途中経過くらい教えてくれたらいいのに。

陽子 てか、採択でも不採択でも早く結果出してほしい。

福本 ほんと。：ちよっとお茶でもいれましょうか。

真理子 あ、私やります。福本さん座ってて。

福本 え。

真理子 いいから。

真理子、よろよろ立って茶を入れる。

山口が入って来る。

山口 今晩は。

真理子 あれ。今晩は。

陽子 どうしたの。

山口 陣中見舞い。入っていい？

陽子 いいけど。

山口 はい、舟和の芋羊羹。

陽子 みんな私が芋しか食べないと思ってるのかな。

山口 いらないの（ひっこめる）

陽子 いります。（受け取る）

山口 すごい書類の山ね。

陽子 これでまだ一部だよ。

山口 やっぱりね。

陽子 どういう風の吹き回し？ 急に訪ねてくるなんて。

山口 ごめんなさい。気にはなってたの、ずっと。でもあんな啖呵切っちゃったから来にくくて。でもこれ読んで気が変わったの。（メールの写しを出す）

陽子 （読む）

山口 理沙ちゃんの彼氏の、レン君からのメール。「私たちのために道を探してくれている人が遠い国々にいるということは、私たちの生きる支えになっています」って。そんな風に思ってくれてるんだってわかって…。結果だけが全てじゃないのよね。

陽子 誰がこれを…？

山口、福本を指す。

福本 すみません、勝手に。でもどうしても手伝ってほしかったんです、山口さんに。

山口 今更だけど、私にも出来ることがあったらお手伝いさせてくれない？ それともお邪魔かしら。

陽子 何よ今頃になって！（そっぽを向く）なあんてね。（手を差し出す）うれしいよ。

福本 もー。

山口 ありがとう。（握手）

真理子 山口さん、マジ嬉しいっす。

山口 あの時はごめんなさい。

陽子 いいや。こんなに大変だつてあの時わかってたら私もやらなかったかも。

山口 嘘。それでもやってたわよ。

真理子 お茶にしましょう！

山口 レン君は元氣そうね。

陽子 後遺症はあるみたいだけど。

山口 そうなの？

福本 まだダツカに戻れないんですね。

山口 ええ？ 現地で足止め？

福本 はい。

山口 理沙ちゃん？

陽子 ダツカと日本と行ったり来たりしながら支援活動やってるよ。

山口 偉いわね。

福本 ほんとですよ。

山口 ご両親も心配でしょうね。

陽子 それがね、姉も手伝ってるらしいの。

山口 お母さんが？

陽子 うん。やっぱり放っておけないんだろうね。

山口 そう。でもそれはよかったんじゃないの。

真理子がお茶と羊羹を出す。

真理子 はい、どうぞ。

陽子 （食べる）うまー。

真理子 幸せー。

福本 疲れた時には甘い物。

山口 よかった。：で、INFELDの結果ってまだ出てないの。

陽子 まだ。

山口 そう…。でもよくここまで漕ぎつけたわよ。

陽子 則ちゃんの活躍が大きかったね。

福本 いや、それよりセリーヌですよ。もうすごいんです、情報網が。

山口 情報網？

福本 つながってるんですよ、世界は。フランスにいと、イギリスアメリカで何やってるか毎日見えるんです。で、何か言うとか誰かが「ちよつとアメリカに電話してみようよ」「メールしてみようよ、ちよつと待って」とか言つて、「あ、昨日それ発見されたみたいだよ」「えー！」「みたいな。世界と研究やつてる感じ。」「ちよつと面白いからそれニューヨークの研究者と相談してみるよ」とかって。

山口 へえ。

福本 だけど日本は見えないんですよ。時々「日本人の研究者って何研究してんの」って言われて気づいたんです。ほんとだ、見えないって。イギリスとアメリカがこんなに見えるのに日本が見えない。ちよつと不思議ですよ。日本ですごい人たちいっぱいいるのに。

山口 それはまずいわね。

福本 はい。

陽子 日本はガラパゴスなんだよ。

真理子 ガラパゴス？

陽子 あるでしょ、大陸から離れてて進化から取り残された島。

真理子 ああ。

陽子 日本で居心地いいじゃない。日本は日本だけで完結できるくらいの人口があつて歴史があつて文化があるから、中にいるとそこでヌクヌクしちゃう。そうすると外を知る必要もないんで、あんまり他と比べない。

真理子 なるほど。

陽子 何かがあつた時ね、すごいおっきなことがあつて外圧が来ると突然そこだけ調べてそこで急に取り入れようとするから、なんかグチャグチャになっちゃう。いろんなとこで歪むんだけど、全体的に知ろうとか取り入れようとは絶対してない。

福本 ですよ。それはなんか感じました。

山口 外に出たから。

福本 はい。もつたないですよ。やつぱり遅れちゃうから、あの雰囲気と。昨日今日出たデータがすぐ外国と比較出来て、議論して、修正してつてやつてる国の人たちと比べて。

陽子 則ちゃんや真理ちゃんたちの世代ががんばればいいの。今はインターネットもSNSもあるんだから。

福本 うむ。

山口 真理ちゃんも行ったら、留学。

真理子 絶対行きます。英会話頑張ってますから。

陽子 ：セリーヌにはほんとに世話になったなあ。ワクチン開発支援機構のエマたちにも、ダッカ大学のエディにも。セリーヌが言つてたよ、「ワンヘルス・ワンワールドだ」って。

山口 どういうこと？

陽子 人間の健康と、動物の健康と、地球の健康は一つにつながってるってこと。人間の活動の広がりや温暖化や環境変化をもたらして、新しい人獣共通感染症が広がっているんだから、それに対応する

ためには国境を越えて分野を越えて協力し合わないとダメなんだって考え方だよ。欧米ではもうそれを実践に移してるのに、日本はまだまだ。

福本 悔しいですね。

陽子 そんなところ企画書で力説したんだけどなあ。

山口 採択されればいいわね。

陽子 さあ、もうひと踏ん張りしますか。

山口 私やるわよ。(片付ける)

福本 すみません。

陽子 (パソコンに向かって) まだ来てませんよねー。(メールリングリストを見る) あ。

福本 え。

陽子 来てる。INFELDからメール。

真理子 え、なんてなんて？

陽子 ちょっと則ちゃん開けて。

福本 何言ってるんですか。早く開いてください。

陽子 真理ちゃん！

真理子 ここは先生が。

山口 早く開きなさいよ！

陽子 じゃあ。(開く) adopted。採択…？

福本 えええー！

山口 (のぞき込んで) 私たちは以下の金額を支給します。…あなたの方の、ナポウイルスワクチンについての研究に…ええ？ これって…3000万ドルってこと？

陽子 3000万ドルっていくら？

山口 ざっと、30億円じゃない。

真理子 わー！！

福本 でかいビルが一個立つよ！

陽子 すげー！ やったー！！

山口 おめでどう！

一同飛び跳ねたり叫んだり、抱き合ったりハイタッチしたりしている。ホリゾントが緑に輝く。

陽子 これでワクチンが作れる！ そうだ、理沙に知らせなきゃ！ (パソコンにとりつく)

福本 セリーヌに知らせます。

山口 学長にも知らせた方がいいんじゃない？ これはすごいニュースよ。

真理子 えーと、じゃあ…あれ。

一同パソコンやスマホに向かってメールを打つ。

真理子 あの、ちょっと。

山口 何？

真理子 国立感染研究所からメールが来てますよ、INF EIDのメールの前に。

陽子 え？

真理子 中国の武漢で新しい感染症が発生したって。

福本 ええ？ S A R S？

真理子 とは書いてないす。新型だって。「詳細は調査中」。

陽子 なんだろう。

山口 それよりこっちこっち。ねえ、INF EIDの書類、注意書きが10ページくらいついてるわよ。

これちゃんと読まなくちゃダメじゃない？

陽子 うえー。ねえ、とりあえずざっと目を通してよ。

山口 もー、しょうがないな。(パソコンの前に座る)

あちこちからのメールや電話の対応に追われる一同。

ホリゾントの緑はやがて炎の色に染まる。

その中に「2019年12月」と、入れ替わって「2023年3月」という数字が浮かぶ。

やがてホリゾントの明かりは消えて、「2023年3月」だけが残る。

第七場 2023年3月31日 16時

デスクルームに、陽子、真理子、福本、山口、理沙、麻子が集まっている。

机の上には飲み物やタッパー、乾きものが若干用意されている。

陽子 (立ち上がって) 本当に、皆さんお疲れ様でした。今の時点で、全世界で6億7千万人以上の人が新型コロナウイルスに感染して、680万人以上が亡くなりました。私たちはリアルタイムでウイルスが変異し続け、パンデミックが広がるのを見てきました。本田先生がおっしゃっていたことを思い出します。本来ウイルスは自然宿主である野生動物とは平和な共存関係を保ってきた。でも人間が、人口を増やし、森林を破壊し、都市化を進めて、ウイルスの生活環境に入り込むことで自ら感染症を招き入れたのだと。その通りの結果になりました。しかも、亡くなった人の多くは、十分な治療を受けられない貧しい人たちです。貧富の差が極限にまで拡大していることも、コロナが私たちに示しました。

：そんな中で私たちはナポウイルスに対するワクチンの開発に取り組んできましたが、残念ながら今日、2023年3月31日をもってINF EIDの資金提供は打ち切られることになりました。コロナがあつて、いろんな物資が手に入らなくなって、プロジェクトが遅れて、まあいろんなことがあつてこういうことになったのは本当に：。ワクチンを待っているレンやバングラデシュやインドの人達にも本当に申し訳ない結果になってしまいました。理沙ちゃん、ごめん。おぼちゃんのせいじゃない。：でも本当に残念です。

理沙

山口 イタリアの製薬会社がナポワクチンの優先順位を下げちゃったでしょ、コロナの事業を優先して。あれが致命的だったわね。

真理子 それもだけど、そもそも研究がどれくらい進んでるかじゃないんですよ、INFELDの判断基準が。ものすごい金が動くから監査監査って、何遍改善命令出たかわかんないし。不正利用してんじゃないかみたいな言い方でもう頭来ました。

山口 日本で先進国のつもりでいるけど、彼らから見たら極東の、ちいちゃい国だってことかしらねえ。麻子 だって日本は経済大国じゃないですか。

陽子 そうなんですけどね。でも、世界には助けてくれる人もいっぱいいました。フランスのセリーヌや、オランダのエマや、バングラデシュのエディや、他にもいっぱいいるんです。みんな打ち切りになるって聞いてINFELDに対してすごく怒ってるし、陽子が再開するなら絶対協力する、お前のワクチンが一番いいからって言うてくれます。

麻子 そうなんですか。そういう人もいるんですね。

陽子 INFELDが打ち切られても、研究は続けよう。他の道を探そう。今まで積み重ねてきたことは絶対無駄にはならないから。

福本 先生ナポワクチン応用してコロナのワクチンも作っちゃいましたもんね。

山口 あれはすごいわ。

福本 はしかのウイルスワクチンにコロナの抗原のつけて。あれ一回打ったら六〇年打たなくてすみますよね。

真理子 しかも超安いし。冷凍装置いらないし。

福本 だけど製薬会社が手を出さない。

山口 だから、かもしれないわね。ヘイザーとロデルナは半年ごとに売れるでしょ。半年ごとに何兆円も儲かる方が企業としてはいい訳ですよ。

福本 おかしいですよ。

真理子 ほんとつす。

理沙 あのね、私思うんだけど…。

陽子 何？

理沙 日本がヘイザーとロデルナにあげたお金をおばちゃんの研究に使って、ワクチンを作って、貧しい国にプレゼントしたらいいと思う。

真理子 あ、それいい！

理沙 そしたら貰った国はすごい喜んでくれるし、日本はいい国だって言って、仲良くしてくれるし、長い目で見たら絶対日本にとってプラスになると思う。

麻子 ほんとね。

山口 素晴らしいわ。もう1兆5千億円くらいヘイザーとロデルナに払ってるんだから。これからも払うつもりみたいだし、お金はあるのよ。そういう大局的に見る視点が今の日本の政府には無いのよね。

陽子 そうやって仲良くなっていけば、戦争なんてしなくてよくなるかもしれないね。

理沙 うん。

真理子 理沙さんが総理大臣になってくれればいいのになあ。

理沙 えー。

麻子 総理大臣？

真理子 そしたら自分投票します。

福本 僕も一票。

陽子・山口 私も。

理沙 えー。(笑)ほんとに、なれるもんになりたい。そうして、薬を作りたい。

山口 レン君元氣？

理沙 コロナにかかって大変だったみたい。

山口 ええ！

理沙 また感染予防で道路が封鎖されちゃうし：でも、いまはもうよくなったって。

山口 良かったわね。

理沙 でも、振られました。

山口・陽子 えっ。

理沙 ずっと看病してくれてた向こうの女性と婚約したって。許してほしいうって手紙が来ました。

真理子 そんな。

理沙 あー、コロナが無かったらなー。

山口 ひどいじゃない。

理沙 あ、でも今でも友達友達ですから。学校の支援はこれからも一緒にやっています。

陽子 つらくない？

理沙 つらいですけどー、しょうがないし。

麻子 コロナがあげたら、私がバングラデシュに行ってレンをひっぱたいて来ようと思ってるんですよ。

理沙 ママー。

麻子 冗談よ。

理沙 でも、ママが学校に来てくれたらうれしい。

陽子 ずいぶん変わりましたね、麻子さん。

麻子 今だってできれば日本にいてほしいですよ。でも、この子が元気にしていれば私は。

理沙と麻子を除く一同、福本に「なんか言え」と合図する。

福本 理沙さん。

理沙 はい。

福本 理沙さんはすごい、魅力的だから、今この瞬間にも、きっと理沙さんを思ってる人が近くにいますよ。

理沙 えー。そうかなー。

福本 絶対います。たとえば、僕とか。

理沙 …ほんとー？

福本 はい。

理沙 …うれしー。ありがとうございます。

福本 だから、元気出してください。

理沙 はい。

陽子 さあ、乾杯しようか。

山口 そうね。

陽子 ほんとにお疲れ様でした。乾杯。

一同 乾杯。

山口 (タッパを開いて) はい、ポテトサラダと大根の煮物。

理沙 すごーい。

真理子 ワオ！

麻子 私はお稲荷さん。

福本 やった。いただきます。

みんなでワイワイやっているところにノックの音。

陽子 はい。

田部が箱を抱えて入って来る。

田部 お邪魔します。おや、みなさんお揃いで。

福本 田部さん！

田部 先生お久しぶりです。

陽子 何しに来たの。

田部 えー。だって、INFELDが打ち切りになるそうじゃないですか。

福本 何で知ってるんですか。

田部 私早耳なんです。それで皆さん落ち込んでらっしゃるんじゃないかと思って、ほら、ケーキをね、差し入れに来たんですよー。

真理子 落ち込んでなんかいません。

陽子 冷やかに来たんだったら帰って。

田部 まあ、折角持ってきたんですからどうぞ。

真理子 帰って下さい。

田部 おー怖。そんなこと言わずに、

田部、激しく咳き込む。

田部 失礼。(なおも咳き込む。周囲を見て) いや、後遺症ですから。

陽子 後遺症？

田部 : 第七波でね、やられましたよ。ワクチンもちやんと打ってたのに。とつくに治ってるはずなのに、咳がね、とまらなくて、全身倦怠感。

陽子（椅子を出す）はい。

田部 すみません。（座る）

山口 典型的だわね。

田部 ：まさか自分がこんなことになるとはね。思いませんでした。

福本 ゆっくり休んで治したらいいじゃないですか。

田部 ゆっくり休んでたら首ですよ。首。ちよつとでも動けるようになったら即仕事。うちの会社も今厳しいんです。いろいろと、資材が高騰してね。

山口 でしょうね。

田部 いい気味って思ってるんじゃないですか？ 偉そうにして基礎研究に金を出さないからそうなるんだって。

福本 そんなこと思うはずないでしょう？

田部 そうですか？ 私は思いますよ。大体ねえ、日本政府がオリンピック優先でPCR検査もやらずにずぶずぶで感染を広げちゃうからいけないですよ。…なあんてね、今更言ってもしょうがないけど。

陽子 わかったから、もう帰って休みなさいよ。

田部 先生もたいへんですねえ。研究を続けるためにはあっちこっちから必死になって金をかき集めなくちゃならない。大事なことをやってるのにねえ。

陽子 いいから、さあ。

田部 だからね、私は今日もう一つプレゼントを持ってきたんです。むしろケーキよりこっちが本命ですよ。

陽子 何。

田部 ：日本はワクチンの開発で後れを取ったでしょう。政府も何やってんだって叩かれてね、ちょっとだけ対応を考えたんですね。

福本 え？

田部 日本科学研究開発機構が、ワクチンや新薬の開発に金を出すことになったんです。近々発表されます。

山口 なんでそんなことをあなたが知ってるの？

田部 言ったでしょう、私は早耳なんです。募集も始まりますよ。

山口 でも、百万や二百万の助成じゃどうにもならないのよ。

田部 億単位ですよ、助成金は。

陽子 ほんと？

田部 嘘言ってどうするんですか、どうせいずれ公表されるのに。

福本 先生！

理沙 おばちゃん！

陽子 ：よし、挑戦しよう！

真理子・理沙 わー！

福本 やるぞー！

山口 絶対取りましょう！ これまでの蓄積があるんだから大丈夫よ！

福本 よーし、残念会転じて決起集会だ。田部さん、ケーキいただきます！
真理子 やったー。

理沙 コーヒー入れましょうか、バングラデシュの。

一同準備に取り掛かる。

ホリゾント、しだいに緑になる。

陽子 ありがとう。(田部に手を差し出す)

田部 (手は取らず) いやいや、私は情報を提供しただけですから。

陽子 それでも。

田部 申し上げておきますけど、今後大学はもつと大変なことになりますよ、先生。儲からない研究なんかやめろって圧力はどんどん強くなるでしょうね、きっと。

陽子 そう思う？

田部 はい。

陽子 でも私たちは研究をやめないよ。手をつないでくれる人が世界中にいるのがわかったから。

田部 はにやりとする。少し咳き込む。

福本 先生、ケーキ切れましたよ。田部さんも。

田部 え、私もいいんですか？ うれしいなあ。

田部 は福本の方へ行く。

ホリゾントに本田が現れる。森を見まわし、陽子に手を振る。

陽子 も手を振り返す。

真理子 先生！

陽子 はいはい。

ホリゾントが緑に染まり、本田と陽子が残る気味に、暗転。

おわり